

六月の雨

九月の花火

目次

雨の中花のように舞い降りたのは天使かそれとも.....	3
雨の底で靴を無くした君と二人思い出話に花を咲かす.....	71
地上百十一メートルの観覧車で聞く花火の音は銃声に似ている.....	83
エピソード.....	158
あとがき.....	164

本編×学園アルドノアの捏造甚だしい世界観です。

死ネタ含みます。

雨の中花のように舞い降りたのは天使かそれとも

伊奈帆 (15) × スレイン (20)

雨の中、君が空から降ってきた。

受け止められたのは、傘ではなくレインコートだったから。僕が傘を差していたら、きっと傷つけてしまっていた。体が串刺しになって、死んでいたかもしれない。傘の花が咲くスクランブル交差点の真ん中で、君は僕の真上から降ってきた。

ゆっくり、花が散るような速度で。

その体を、僕は両腕で受け止めた。重さはなかった。濡れてもいない。

周りの人は、気がついていないみたいだった。

それから一週間。しとしと、ざあざあと、雨は降り続けている。このまま雨が降り続いたら、神話のように人間は洪水で流されてしまうかもしれない、とらしくもないことを思っていた。

伊奈帆は窓の外に向けていた視線をソファの上に向ける。足の爪先が端からはみ出して浮い

ていた。白い爪先。青い服。薄い腹の上で重ねられた両手。銀の鎖がかかった首と散らばる細い髪。美術の教科書に、こういう絵画があった気がする。瞼は固く閉じられたままだ。

君はずっと目を覚まさない。

登校中だったけれど、あの日は君を抱えて家に戻った。学校をずる休みしたのは初めてだ。歩いているうちに君の体は重さを増して、やっとリビングのソファに降ろした時、僕の雨合羽の中は汗でびしょ濡れになっていた。

君は死んだように眠り続けている。

じゃあ死んでいるんじゃないか？と思うところだけれど、呼吸をしているのが僕にはわかる。平たい胸が一定の間隔で上下している。生きていると思う。

でもユキ姉には見えていないようだから、きっと君は普通の人間ではないのだろう。

僕の定位置となった床から、ソファに横たわる君の顔を眺める。

色素の薄い髪と肌。北欧系だろうか。目鼻立ちのすっきりした綺麗な顔だ。閉じた瞼の下はどんな色をしているのだろう。背は僕より少し高いくらい。手足は細くて、布地の薄い上下の服はだぶついて皺が寄っている。

どんな理由で君が空から降ってきたのか、僕は知らない。

「君は誰？」

初めて会ったはずなのに、初めてじゃないように感じるのなぜだろう。いつかどこかで、君のことを見たような気がする。

「目を覚ましてよ」

金色の長い睫毛が、微かに震えた。瞼が持ち上がり瞳が揺れた。碧の色。僕を見て大きく一度瞬き、開いた唇。白い歯。赤い舌。

「伊奈帆？」

いつか聞いたような声が僕の名前を呼んだ。

「ダイトツカ？」

「大幅な値下げのことだよ。お買い得なんだ」

卵パックを買い物かごに入れながら、伊奈帆は答えた。同行人はもの珍しそうにそこら中の

文字や品物を眺めている。

「スーパーは珍しい？」

彼はこくりと頷いた。天井を見上げた首の形が綺麗だ。

「初めて来た。市場みたいだ。こんなに狭いところにたくさん物が並んでいるのがおもしろい」
今度はワゴンセールの見切り品を眺めながら、スレインは口元に笑みを浮かべた。伊奈帆はほっとする。普段、彼はあまり笑わないからだ。

名前はスレインという。ファミリーネームは知らない。

カートを押しながら、伊奈帆は小声で聞く。

「好きな食べ物？」

「…思いつかない。前…」

「前？」

牛乳パックを手にとって振り向くと、スレインは半袖から伸びた腕を軽く組んでいた。パックを横向きにしてかごに入れる。指先が冷たい。このエリアは寒い。

「いや、口が滑った。なんでもない」

「じゃあ、嫌いな食べ物は？」

「特にない」

「卵焼きは好き？」

「…ダシマキタマゴ、というやつか？」

「そう」

「うん。嫌いじゃない」

「じゃあ、今日はそれにしようかな」

スレインは眉根を寄せた。

「僕は食べられないんだから」

前に二人で食事を試したが、まず箸にもスプーンにも触ることができないとわかった。持ち上げようとしてもすり抜けてしまう。食べさせようとしたけれど、やはりそれもすり抜けてしまった。

「気持ちの問題だよ」

「…まあ、伊奈帆がいいなら」

レジに並ぶ。平日の夕方人が多い。特売のせいで、いつもよりも混雑している。スレインは居心地悪そうに体を縮め、伊奈帆の後ろに立っている。その腕のあたりに、後ろの買い物客の腹が透けていた。

彼の姿は、他の人間には見えていない。それに、触れもしない。それが、少し嬉しい。

「やっぱり、僕しか君を認識できないみたいだね」

「そうだな」

こっさり手を握ってみた。応力がある。握り返されることはなかったが、指がびくりと動いた。

「触れるのも」

「…そうだな」

スーパーの自動扉を出て、傘立てのビニール傘を引っこ抜く。いつだったか、急に降られてコンビニで買った。とどこどこ錆が浮いてきている。傘なんて差すのは面倒だが、食材が濡れては仕方がない。

右手に傘を持ち、左手に買い物袋をぶら下げて帰路に着く。隣を歩くスレインに雨がから

ないよう傘を傾けるが、「僕は濡れないから」と彼は僕の手越しに柄を押した。
雨がスレインの体を透き通って地面に落ちる。

そう。

彼が目を開けたのも、今日のような雨だった。細い雨の斜線が世界を塗りつぶそうとしていた日。

「伊奈帆？」

瞼が開いた。ぱちぱちと、瞬きを数度繰り返し焦点が結ばれた。目が合う。そして真円に見開かれた。その色。

とても寒い湖面のような、不思議な虹彩。

「僕を知ってるの？」

彼は半身を起こして呆然と口を開けたまま、視線を上下に動かした。そしてゆっくりと首を振る。起こした体は薄くて華奢だった。

「いや、人違いだ」

日本語だ。会話が成立することに安堵して、伊奈帆は正面向いて座りなおした。見上げる碧の目は薄氷のように静止していた。

「僕の名前は伊奈帆。界塚伊奈帆」

彼は足を下ろし、ソファに座り直した。床に降ろされた素足は、温度がないみたいに白くて滑らかだ。唇が薄く開いた。

「…年は？」

「十四」

それを聞いて、彼は合点がいった、という風に大きく一度頷いた。

「…だから…」

何かを言いかけて、俯いてしまった。

「何？」

「いや、何でもない」

「君の名前は？」

俯いていた顔が持ち上がった。人形のように表情のない顔で、白い唇が動いた。

「スレイン」

「スレイン……」

不思議な響きだ。初めて聞いたはずなのに、初めてじゃない気がする。

スレインは顔を巡らせて室内を見渡した。

「ここは？」

「僕の家」

「……どうして僕は、ここに？」

「君が空から降ってきたんだ」

ありのままの事実を告げると、彼は表情を崩した。ぽかんとかそんな擬音がつくような分
かりやすい顔。そんな顔もできるんだ。

「……はあ？」

さっきまで人形とか、もしかすると天使かもしれない、と馬鹿なことを考えていたのに、表
情が変わると、全くただの人間のように親しみやすくなった。

「嘘みたいだけど本当だから。それから一週間、そこで寝てた」

「どうして、ここに運んだ？」

「受け止めちゃったし、投げ出すわけにもいかないから」

彼は傷ついたような顔をした。どうしたんだろう。何かひどいことを言ってしまったのだろうか。数秒の沈黙の後、スレインは僕を見て首を傾げた。

「その服は？」

「制服だよ。学校の」

詰襟の学生服を碧の瞳が凝視する。中学校、というとはっと目を見開いて頷いた。

「学校？ああ、そうか」

きゅ、と引き結ばれた唇の色はやはり白い。

頬も瞼も、額も手も。足も。白い。

人間だよね？

「君は何者？」

「さあ」

「生きてるの？」

彼は自分の腕を上げ、足首を回し、顔を触った。

「多分、死んでる」

雨の幽霊は、そう言って困ったように笑った。笑顔は第一印象より、ずっと子どもっぽかった。

次の朝。伊奈帆が目を覚ますと、スレインの姿はどこにもなかった。

「スレイン？」

彼はソファの上にいたはず。今はもぬけの殻だった、家の至る所で聞こえるように名前を呼んだが、返事もないし気配もない。

「いないの？」

もともと、突然現れたのだ。突然消えても不自然ではない。今まで感じたことのない不思議な苛立ちが沸き起こったが、彼は言っていたではないか。

「死んでる、か」

ハの字に下がった眉。鋭い目が細められ柔らかくなり、口は左右非対称に曲げられて。笑顔

だとしたら、あまりに下手で、泣いているみたいにも見えた。何か言いたいだろうに、何も言わず。口は美しく弧を描いて。

死んでいても、生きているみたいだった。僕には。

「いなくなるなら」

黒い制服を着て、玄関のドアを開けた。眩しさに手を翳す。腹が立つくらいの晴天。

「さよなら、くらい言っていけよ」

そして、彼はその三日後に再び現れた。

「おかえり」

「え?…スレイン?」

帰宅してリビングに足を踏み入れると、ソファの上に人影があった。

「どうして?どうやってここに?」

伊奈帆が詰め寄った分、彼は後退した。苦笑い。あ、笑ってる。

「気がついたらここで寝ていた。その恰好は？」

「ああ。雨が降っていたから」

今日は午後から雨が降ってくる予報だったので、レインコートを持って行ったのだ。今は濡れている。着たまま室内に入ったので、雨の雫が通り道に点々と落ちていた。

「オレンジ色か。お前らしい」

そこでスレインはぎょっとしたように目を見開いた。そんなびっくりするようなこと、今起きたかな。彼が静止したままなので、素朴な疑問をぶつける。

「なんで、この色が僕らしいの？」

オレンジ色なんて、別に好きでも何でもない。スレインは口を開いて、また閉じて目を伏せ、もう一度開いた。

「……いや、なんでもない」

全然何でもないようには見えないんだけど。

スレインはきよろきよると室内を見渡し、壁掛けのカレンダーに目を留めた。

「あれから、何日？」

「えっと…三日」

「そうか」

そういえば、スレインはどこにいたんだろう。

「どこにいたの？」

「わからない」

ということとは、誰か別の人のところにいたわけではないのか。ほっとした。どうしてほっとしたのか、自分でも不思議だけれど。

「どうして、また現れたの？」

「わからないな」

こちらもさっぱりわからない。そもそも、この超常現象はどういうわけだろうか。

「触っていい？」

「え？」

返事を聞く前に指先を握った。すり抜けない。柔らかい。冷たくなかった。力を込めると、どくどくと血流の感触が伝わる。

「…触れる」

「えっと…」

スレインが居心地悪そうに身じろぎした。慌てて手を離す。顔が熱い。無言の室内に、雨の音が響く。雨の音って、こんなに大きかったっけ。

「あの日も、雨が降っていた」

「あの日？」

「君が空から降ってきた日」

揃って窓の外に視線を送る。灰色で曖昧な風景。

「そういえば、目を覚ました時も雨だったな」

「昨日と一昨日は晴れていた」

「うん」

「雨の時だけ、スレインは僕の前に現れるんだ」

彼は不思議な表情で僕を見つめた。泣きそうにも見えたり、笑いそうにも見えたり、ちょっと怒っているようにも見えた。

「…どうしたの？」

「…何でもない」

スレインは首を振ってソファに座り込んだ。何故か、床は透過しないし椅子やソファには座れるのだ。伊奈帆はレインコートをハンガーにかけ、物干しの下に新聞紙を敷いた。濡れてつやつやと光るオレンジ色を、スレインはずっと眺めていた。

「ただいま」

「おかえり」

玄関を開けると、スレインが自然な調子でおかえり、と言った。伊奈帆はにやける顔を見られたくなくて下を向いた。自分の履くスリッパの色が見えた。汚れて縫い目がほつれている。そろそろ買い替え時だ。

雨の日だけの不思議な邂逅は、もう三か月になる。

ユキの帰りは伊奈帆より遅い。だからいつも、もっと小さい頃から伊奈帆は誰もいない家に

鍵を開けて帰っていた。ただいま、なんて言った記憶は数えるほどしかない。おかえり、と言われたのも。

スレインは伊奈帆にとっておかえり、と言ってくれる数少ない相手だった。

スレインが伊奈帆に近づいて、二人の距離は三歩分になった。顔が近いな、とちょっとだけときどきする。

「その恰好…傘は？」

その質問は当然で、伊奈帆は頭から全身ずぶ濡れだった。額の水滴を手の甲で拭う。床に雫がぼたぼたと落ちた。

「急に降られた。傘は嫌いなんだ。レインコートを出す前に濡れたから、そのまま走った」

「…そうか」

『この姿を見て、何か言うことはないのか』

『ずぶ濡れだ』

スレインは、自身の両肘を握りしめて突っ立っている。深刻そうな顔だ。

「何？」

「いや…」

洗面所にタオルを取りに行くが、なぜか後ろからついてくる。鏡に映らない彼に振り向くと、右手が差し伸べられていた。ん、と顎を上げている。

「拭いてやる」

「え？」

タオルを持つとした手は通り抜けた。スレインが伊奈帆の手を取りタオルに触れた。今度は持てた。

「ちょっと体のどこか、触っててくれるか」

「ええと」

手の置き場に困って、結局肩に手を置いた。思ったより硬いし温かい。どぎまぎと目を逸らす。タオルでわしわしと頭を拭かれ、前髪がばさばさと目にかかった。

「…お前らしい」

どういう意味だろう。時々、スレインは何の心当たりもないことを僕らしいと言う。

どこかで、会ったことがあるのだろうか。僕が忘れているとか。

それとも、そっくりさんとか。

「そうかな」

顔が近い。森林のようないい匂いがする。目が合って慌てて下を向く。彼の少しはだけた襟ぐりから、古い傷跡が見えた。たくさんある。背中がざわついた。

「この傷は…？」

思わず聞くと、スレインはばつが悪そうに微笑んだ。

「ああ…昔のことだ」

何でもないような口ぶりに、なぜか無性に腹が立った。

「誰が？」

誰だろう。こんなことをしたのは。消えない傷が残るほどの暴力。消えた傷はもっとたくさんあったはずだ。

誰が、何のために？

「…君には責任のないことだ」

意味が分からない。そりゃ、そうだけれど。

突き放された気分だ。

もう話す気はなさそうだ。タオルがやけに顔にかかる。視界に入るのは自分の前髪とタオルの布地だけだ。

「そう」

目を閉じた。でも、見える。瞼の裏。縦横に刻まれた白い傷跡が焼き付いて離れない。

「スレインは、僕のことを知っているんじゃないの」

日曜日の午後、リビングのソファに寄りかかって伊奈帆は言った。スレインはソファの上で伊奈帆の学校の教科書を読んでいた。背中に、彼の足が触れている。

「どうして、そう思う？」

「名前を知っていた。それに時々、前のことを話そうとする」

スレインが顰め面で笑った。年上ぶった感じがして、ちょっとむっとする。

「お前らしい」

またそれだ。そうやって、いつもはぐらかす。前も何も、僕は知らないっていうのに。

「前っていつ？」

「ここではないどこか」

「それってどういうこと？」

スレインは窓の外をじっと見た。視線の先では、街路樹の銀杏が雨を受けて扇形の葉を楽器のように揺らしていた。

彼をこの腕で受け止めてから、もう四か月。最近雨が少ないから、あまり会えない。特に学校がない休みの日に彼と過ごすことは稀だった。今日は朝からずっと二人で家にいる。特売もあったけれど、そんなことで時間を使うのはもったいないと思った。

「月は丸いんだな」

スレインが現代文の教科書に目を落として呟いた。

「え？」

文章を読み上げたのかと思ったが、後には続かなかった。月が丸いなんて、当たり前だろう。何かのたとえ話だろうか。

「わけがわからない」

「それでいい」

スレインは読んでいた本を閉じて脇に置く。彼の指が、裏表紙の記名欄をなぞった。少し恥ずかしい。字は上手くないのだ。

「お前にも、こんな時期があっただんな」

「何のこと？」

静かに笑うだけで答えはなかった。その顔をされると、何も言えなくなってしまう。彼の微笑みは、泣き笑いのようだ。

「スレインは何歳？」

「多分、十九か二十」

もう寝ているかと思ったけれど、すぐに返事があった。真っ暗な壁を見つめたまま、背中
の温度を感じる。温かい。やっぱり、生きているみたいだ。

「年上だ」

「当たり前だ」

「どうして当たり前なの？」

「ああ、…いや」

同じベッドで右と左を向いて、小さな声で話す。

最初に、一緒に寝ようって言い出したのは僕だ。出会ってすぐ消えた時みたいで、知らない
うちにいなくなっているのは嫌だった。スレインは渋ったけれど、結局隣で眠ることを承諾し
てくれた。

夜のうちに雨が上がった日は、やはり朝にはいなかった。でも、まだましだった。
空気が残っているような気がして。

「どこから来たの？」

「遠いところ」

「月より？」

以前彼と交わした会話を思い出し、言ってみた。SFが過ぎるが、遠い宇宙からきたのでは、とは考えたのだ。

「いい勘してる」

くつついた背中が笑った。

「月よりも。もっともっと、遠いところ」

声が落ちた。これ以上は何を聞いても無駄だ。想像してみる。遠いところ。もしかして、もう戻れないのだろうか。

「そこに、僕もいた？」

「…」

この沈黙は肯定だ。そういうのは、そろそろわかってきた。

「どういう関係？」

敵か、味方か、友人か。家族か。

もしかしたら、恋人同士だったりして。

「わからない」

「わからない？」

頷く気配がした。言葉を待つ。

「言葉で説明できるような関係じゃなかった」

また会話の行き止まりだ。あんまり話し上手な方じゃない。お互いに。

「その服って、病院着？あの傷のせい？それとも、病気だったの？」

気になったことを思いつくまま聞いていくことにした。そう、彼の身に着けている薄青の下。私服というには軽装過ぎるし、パジャマというには無粋だ。

「違う」

言葉は続かない。

「そのペンダントは？」

ラフすぎる服装に不釣り合いな、クラシカルな意匠のペンダント。

「これは、父親の形見なんだ」

初めて、具体的な返答があった。

「死んだの」

この人も、人の子なんだ。当たり前だけれど、不思議な感じがした。

「昔、火星で死んだ」

火星。図鑑でしか見たことないな。月よりずっと遠いところ。

「スレインは火星人？」

「違う」

違うってことは、火星人はいるってことだ。

「僕は火星人だった？」

「違う」

なんだ。

「じゃあ、今とそんなに変わらない」

「…そういう、ところが」

お前らしい。

言葉に出さないが、そう思ったに違いない。僕らしい。スレインの知っている僕って？

今、どんな顔をしているんだろう。

「これからどうするの？」

「まだ、決めていない」

彼と話すのは半月ぶりだ。真っ暗闇の窓の外では、葉を失った木々が雨に濡れ、街灯の明かりに照らされ黒々と立ち尽くしているだろう。結露と雨で窓は内も外も濡れている。

「ここにいなよ」

息を呑んだのがわかった。何て言うかな。くっついた背中が、ちょっと動いた。

「まだ、決められない」

「わかった」

毛布の中で彼の足の裏に足で触った。温かい。湯たんぽ代わりにすることにして、伊奈帆はそのまま目を閉じた。

「ああ、寒い」

玄関に駆け込むと、スレインがいた。壁に背を預けて、足を組んで立っている。半袖から伸びる生腕と床を踏む素足が目寒い。

「おかえり」

「ただいま…」

スレインが目を見開いてあ、と声を出した。指先が伸びて、鼻の頭にチョン、と触れた。多分赤くなっているだろう鼻先の感覚は鈍い。

「雪だ」

「うん、寒い」

スレインの腕が伸びて、髪にかかった雪を掃おうとした。その手が雪を通り抜けてしまつて、首を振つて雪を飛ばした。置き場を失つた手を握る。じんわりと温かい。彼は「冷たい」と笑つて、かじかんだ手を両手で包んでくれた。

「寒がりなんだな」

「寒いのは苦手なんだ」

スレインが遠くを見るように僕を見た。この顔を見ると、心臓を絞られているような心持ち

になる。

「それは？」

スレインの目線が下で留まった。左手に下げた紙袋を持ち上げる。

「韻子にもらった。誕生日だから」

「誕生日……」

呆然と呟くのは、きっと時間の流れに驚いたからだろう。前に会ってから、もう一月半だ。

靴を脱いで上がり、リビングでエアコンをつける。可動音がして、温かい風が少しずつ室内の空気と混ざり始める。靴とプレゼントを机に置いて、マフラーを外した。毛糸にくっついた雪が解けて、少し湿っている。

「そう言えば、スレインの誕生日はいつ？」

「二月十一日」

カレンダーを見た。前のページは、七日も前に切り取った後だ。

「過ぎてる。もっと早く聞けばよかった」

スレインはソファにだらしなく座って、窓の外に視線を向けていた。雪が降っている。牡丹

雪が街路樹の細い枝に積もっていた。

一人で見たら、寂しい光景に見えるだろうな。

「伊奈帆は、何歳になった？」

「十五歳」

知らないはずはないと思うんだけど。この人は物覚えがいいし、頭の回転も速い。

「その姿は、年を取らないの？」

ふと疑問に思い聞いてみた。初めて会った時から、服も同じだし髪型も同じ。あと、服で見えない傷痕も。

「そうみたいだ」

スレインは手の平を翳して、何かに透かすように見上げた手は静脈が浮き出ていた。生きているように見えた。

「あのさ」

スレインが僕を見た。良かった。聞こえてる。

「散歩しようよ」

「こんな雪の日に？」

スレインは窓の外を指さした。結構積もってきた。

「お祝いだと思ってさ」

寒がりのくせに、と彼は笑って立ち上がった。

「ただいま」

返事がない。

「スレイン？」

今日は雨が降っていた。だから彼はいるはずだ。最近雨が少ないせいで、会えることが少なくなった。今日はバス停で降ってきて、大急ぎで走ってきたのだ。濡れて重いマフラーをぐるぐると取り外す。

雨が降るのを待ち遠しいと思う。そうなのは、彼のせいだ。

リビングに入ると、ソファからはみ出した爪先が見えた。

「寝てるのか」

寝姿を見るのは久しぶりだ。思わず見入ってしまう。無防備な寝顔は綺麗だし、なんだかちよつと、可愛らしい。

目にかかった髪をはらう。

「…意味はないかもしれないけれど」

タオルケットを掛けてやる。一度目は透過してしまったので、次は膝を肩に当てながら、よし、ちゃんと掛かった。

「ああ、先に着替えるんだった」

傘も差さずに走ったから、服は全体的に湿っていた。早く干さないと。そうは思うものの、離れるとこの布は彼を通り抜けてしまうだろう。窓の外に目をやる。外を見るのも癖になってしまった。窓を打つ雨は、勢いを増していた。

「まあ、いいか」

君がいると思うと、時間が惜しかった。傘もレインコートも、走るのには邪魔だ。

「…どうして、君は僕のところに来るんだろうね。雨の中」

くの字に折れ曲がった体の腹のあたりに腰かけて、彼の体に少しでも体重を預けながらタブレットの電源ボタンを押した。

「うん…？」

背中に当たる体が動いて声がした。見下ろすと、ぱちぱちと瞬きをする眠そうな顔がこちらを見た。

「あ、起きた？」

「ああ、伊奈帆。おかえり。…これは？」

スレインの右手が掛け布を持ち上げた。彼の体を透過してしまう前に回収し、端を揃えて、何回か折り曲げる。

「肌寒いかなと思って」

「…ありがとう」

『…ああ、お前か』

『ごめん』

『どうして謝る?』

『こんなことになって』

『…お前のせいじゃない』

嫌な臭いがする。できれば、もう出て行ってほしい。

『それに、慣れてる。平気だ』

俯せの背に、ふわりと布がかかった。その上から、硬い手が肩に触れた。

『そんな顔をするな』

『どんな顔をしていいのかわからない』

「…スレイン?」

「何?」

「いや…何でもない」

目を見ていられなくて、窓の外を見た。雨が降っている。窓に雨粒が当たって、ボツボツと

煩い。ガラスに当たって落ちる雪を睨みつけていると、「服が濡れてる。寒かっただろう」と優しい声がした。適当に返事をして立ち上がり、制服の上着の釦に指をかける。

目は乾いていた。白目は澄んでいた。でも。

泣いているかと思った。

ビニール傘が薄紅の花弁を受け止め、透明な傘は桜色になる。

「綺麗だな」

「初めて見る？」

「いや。小さい頃、父さんと見たことがある。列車の窓からだけれど」

「そうなんだ」

上を向いた顔は嬉しそうに綻んでいた。

「花が好きなんだ」

「そうかもしれない」

ビニール越しの、少しぼやけた空を見上げる。貼り付く花卉の一枚一枚に赤い花脈が薄っすらと見えた。

「君も、あんな風に降ってきた」

「僕が？」

「重さなんかないみたいに」

重さ、と彼は小さく復唱した。

「ああ、月を思い出すな」

「月？」

「…すまない。君の知らない話だった」

スレインが首を振り、伊奈帆の襟元をじっと見た。見慣れない、と言いたげに臙脂のネクタイを凝視している。

「その制服」

「今更？…今日は入学式だったんだ」

入学式、と鸚鵡返しが聞こえ、スレインの指が袖を通り抜けた。

「まだ少し、大きいな。袖が余ってる」

「うるさいな。これから伸びるんだよ」

不貞腐れる伊奈帆にスレインは笑った。

「ああ、違うない」

桜の花びらが舞い落ちる。濡れて光る薄紅色の絨毯を踏みしめ歩く。スレインの姿は雨の雫と花の欠片を透過して、輪郭がぼやけ風景に溶け込んで見えた。

そこにいるよね？

手を伸ばして腕を掴む。握れた。目線の少し上に、スレインの驚いた顔があった。

花に塗れた傘が転がった。内側に舞い落ちた花弁と雨水が溜まっていく。

水と桜の雨の中、向かい合う。

伊奈帆が触っていると、彼の体は水を滴らせ、花びらを受け止める。髪が濡れ、肌が濡れ、服が濡れた。スレインは曖昧に微笑んだ。

「どうした？」

「いや。桜に攫われそうに見えて」

スレインは肩を疎めてくすぐったそうに笑った。

「案外、詩的だ」

腕を引っ張ってみた。一步、近づく。背を伸ばした。丸い碧に移り込んだ自分の瞳が向こうからこちらを見ている。唇が触れた。

柔らかい。

ちゃんとある。ここにいる。

少し冷たい。味はしない。

「…なんで？」

「なんでって…」

キスをするのに、理由なんかないのだけれど。

「君がちゃんといえるかな、って思ってた」

「変なやつ」

その笑顔は、僕ではない誰かに向けられた。

『好きな人にキスするのに、理由がいるの？』

数え切れない小さな雫が、たくさんたくさん降ってくる。いつの間にかそれは、心の窪みに溜まりを作ってしまった。広く深く、どんどん大きくなっていく。

雨の中、君にキスをした。

反対向いた傘にできる水たまりのように、僕は君に恋をした。

雨の日曜日、僕たちはソファに並んで座っていた。スレインは本を読んでいる。四月に買った、高校の教科書。今日は物理を捲っていた。

窓の外では、雨が大きな音を立てている。傘がないと、雨合羽がないと。すぐにずぶ濡れになってしまうだろう。

スレインが空から降ってきたのも、こんな日だった。

この数日は雨続きで、彼はずっとそばにいる。それが心地よい。たとえ僕にしか見えなくても、僕にしか触れられなくても、かまわない。ずっと、こんな日が続いてほしいと思う。

そうになったら、一年中雨になってしまうな。

それでもいい。

「あのさ」

スレインが教科書から顔を上げた。膝の上で広げられた本を取り上げて、床に置く。

「好きなんだ」

「何が？」

「スレインが」

しん、とした。雨の音が聞こえない。聞こえていないだけかもしれない。薄暗い室内は、何もかも色彩が鈍くて、現実感が薄い。雨の日は、世界が遠くなるみたいだ。視界の金色がちらちらと揺れて、スレインが首を振ったのが分かった。

「馬鹿なことを」

かちんときた。生まれて初めての告白だったと今更気づいた。

「誰が馬鹿だ」

「僕は生きている人間じゃない」

「わかってる」

どんどん仰け反って、スレインはソファの背もたれの上に後頭部を乗せた。左手で目を覆っている。

「∴長居をしすぎた。僕のせいだな」

彼が僕の前に現れて、一年になっていた。

その間、ずっと僕の作り出した幻なんじゃないか、という不安があった。

だって、物や人を通り抜けてしまうんだ。僕が触っていなければ。それに、触っていたところで本当に通り抜けていない保証はなかった。それも僕の頭の中の出来事かもしれない。

食事もしない。トイレやお風呂も必要ない。

どう考えたって、尋常ではない。

もしかしたら、これが最後かもしれない。いつもそんな考えが浮かんで、でもどうしたらいいのかわからなくて。でも今日はせめて、後悔しないように言いたいことは全部言いたい。そ

れに聞きたい。スレインのこと。

「君のことを知りたいんだ」

「…言いたくない」

背もたれに張り付いた背中とは、もう後退できない。ソファに両手をついて逃げ道を塞ぐ。目が合う。屈いだ湖面のように静かな瞳だった。僕の目は、どう見えているだろうか。

「君の知っている僕を知りたい」

「…なおさら、言いたくない」

「僕も死んだの？」

「え？」

「どこかの世界で死んで、ここに来たの？僕を探して」

スレインがぼかんと口を開けて、次に声を上げて笑った。こんな笑い方を見るのは初めてだった。僕の腕に挟まれて身動きのできない体をくの字に折って、けらけらと子どもみたいに笑っている。柔らかい髪が額に触れてくすぐったい。目の端に浮かんだ笑い涙を指で拭いて、スレインは顔を上げた。

「とんでもないことを考えるやつだ」

はぐらかされた。でも、それには慣れている。

「それとも君は…僕が作り出した幻？」

「わからない」

スレインは視線を逸らした。その先を追う。雨だ。重い雨。窓の外はバケツをひっくり返したような大雨だ。急に雨の音が煩く仰々しく聞こえ出した。外の風景は雨粒でほとんど見えな
い。室内は一層薄暗い。スレインの髪も瞳も、色を失ったみたいに影が濃い。

世界に二人だけになったみたいだ。

「…試してみるか？」

スレインがぼつりと言った。

「…試す？」

「僕が、君の想像の中の存在か。君とは別個の存在か」

「そんなの、どうやって」

「触ればわかる」

素早い動きで彼の白い手が僕の手首を掴んだ。バランスを崩して、額を彼の肩で強かに打った。凭れなかったまま、意識が手に集まる。僕の手の平は、布越しに彼の心臓の上にあった。鼓動が伝わる。心臓が血液を送り出す音。生命の活動を維持する器官の動き。触った肌の温かさ。

生きている。

生きている。

生きている？

生きているのか？

生きているって、どういうことだ？

「生きているの？」

「君にだけは、そう感じられる」

手の平ではなく、耳を当ててみる。もっとダイレクトに鼓動が聞こえた。どくどく、どく、

少し速いみたいだ。

「心臓が動いてる」

「そう。死んでいるのに、変な話だ」

「死んだ？」

そうだ、最初に言っていた。死んでるって。僕は何を聞いていたんだろう。

「死んだって、覚えているの？」

「ああ。思い出した。溺れて死んだ」

「海で？」

「いや。雨に」

雨に溺れる？

「わかんないよ」

「それでいい」

スレインが両手で僕の頬を包んだ。見上げた顔のパーツ。初めて会った時と変わらない。口が薄く開いた。呼吸をしているのがわかる。喉が動くのがわかる。生きているって、わかる。

「君と一緒になら、生きていられる」

スレインは目を細めて笑った。その顔を見て、やっぱり、僕よりずっと年上なのだと泣きたくなった。

ペタペタと両手で彼の体の感触を確かめる。少し硬くて、でも人肌に温かい。どうしても気になることがあって、服の裾握った。スレインは止めない。だから聞くことにした。

「脱がせていい？」

意外そうに目を丸くして、呆れたように彼の鼻から息が漏れた。

「…大胆だな」

「傷が、見たいんだ」

「ああ」

頷く顔は彫刻のように強張って見えた。心の動きに、体が反応できていないみたいないなタイムラグがあった。でも瞬きを一つして、白い唇が動いた。

「いいよ」

服を握る手をそっと拒絶されて、スレインは服の裾に自分で手をかけた。ソファの脇に落と

された服を目で追う。ぺたんこになって床にはり付いた薄い布。視線を目の前に晒された体にゆっくりと戻した。傷痕はたくさんある。鎖骨の下で揺れるペンダントが鈍く光った。露わになった素肌にそっと指を乗せる。人肌に温かい。血管が脈動する感触が伝わってくる。

「たくさん、あるね。傷痕」

白い肌に、色の違う直線的な傷が無数にあった。普通の生活をしていたらできるわけがない、人為的な傷の痕。痛みを想像して心臓が冷える。

「昔のことだ」

スレインの指が僕の口を触った。離れた指は赤い。強く嚙んだせいか、唇から血が出ていた。

「何があったの？」

「戦争があった」

戦争。

「いつ？」

「二〇一四年」

「今は二〇一四年だよ」

噛み合わない会話の糸口を探す。

「どこで？」

「地球と、火星」

「火星？」

人類未踏の星。まさにSFだ。

そういえば。

月がどうって？

前、なんて言ってた？

月が――。

「火星に、人がいるの？そこに、スレインはいたの？」

「そう。でも、もう遠すぎる」

荒唐無稽だ。でも、作り話だとは思わなかった。

「ここでは、ヘブンスフォールが起らなかった」

目の中に、星が散った。

——天が落ちる。

黒い船。

オレンジ色の馬。

白い鳥。

一面に広がる星の海。

その中の、青い星。

空に浮かぶ割れた月。

——今のは何だろう？

前に聞いたな。と彼は脱ぎ落した服を顎でしゃくった。

「……この服は、罪人の服だよ」

「罪人？」

薄青の上下。薄い布地。病院着のような衣服。見慣れた服装。

罪人の服？

何の？

「戦争の首謀者。人民を惑わし、偽りの楽園を説いた。地球人でありながら、地球を侵略しようとした裏切り者」

火花を放つ眼。突き抜ける声。色のついた空気。世界が揺れるような視界。

初めて見る顔。初めて聞く声。初めて感じる存在の色と温度。

ああ、この人の前では、とても正気でいられない。変わる。自分が。世界が。

「父殺しの罪人」

空気が止まった。瞼が燃え立つ碧を覆い、次に開くいつもの色に変わっていた。ようやく口を開くことができる。喉の奥が粘ついていて、何度が唾を飲み込んだ。

「本当なの？」

「本当だ」

人を殺した？人を騙した？人から奪った？それを悔やんで、だから死んだ？それとも殺された？でも、なぜここに？

雨の中。雪の中。桜の中。傘を差して。

一緒に歩いた。

夜。世界に雨の音だけしかないような寂しい夜。

一緒に眠った。

いろんなことを教えてくれて。

いろんなことを聞いてくれた。

ご飯を食べる時には近くにいてくれて。

髪を拭いてくれた。

名前を呼んでくれた。

おかえり、って言ってくれた。

どんな表情も、どんな言葉も、思い出すことができる。

いつも控えめにそこにいて、あまり多くを語らない。

僕を映す目は。

時々、僕ではない誰かを見ていた。

優しい人。

悲しい人。

寂しい人。

なんで、戦争を？

「なんで？」

「なんでって…」

スレインの手が僕の手を握った。力が入り、爪の先が肌に食い込んだ。

「お前、前にも同じことを聞いた」

伊奈帆、と呼んだのは多分、僕じゃなかった。

『なんで？』

『なんでって？』

『どうして、火星の未来のために戦ったのになって』

『どういう意味だ』

『憎しみや、恨みはないのだろうか』

『過ぎたことだ』

『地球は失われる。君の生まれた場所』

『僕には、故郷と呼べる場所なんてどこにもない』

『自分の未来は？』

『見えなかった』

『誰のため？』

『わからなくなった』

薄暗い独房。換気扇の音。監視カメラのノイズ音。

雨の音。

胸に置かれた熱い手の平が。

離れて。

僕の手を握って。

そこに落ちたのは。

『どうして泣く？』

『好きなんだ』

『何を』

『君のことが』

『馬鹿じゃないのか』

『多分、馬鹿なんだ』

『お前…』

『一緒に生きよう』

『生きる？』

『未来を』

『未来？』

『スレイン』

この名前を呼ぶのは、もう彼だけだ。重なった手を強く握る。
二人で、行こう。

「…前の僕も、こうやって君の傷に触った？」

「ああ」

指でなぞる傷跡はつるつるして少し硬い。どんな感じだろう。痛くはないのだろうか。

「痛い？」

「くすぐりたい」

「…だって」

人の体に触るのはちょっと怖い。白くて細くて、あんまり強く触ったら傷つけてしまうような気がする。

「…可愛いやつ」

頭を撫でられた。わしわしと、犬みたいだ。面白くない。手首を掴む。親指が中指の爪にかかった。細い手首。

「子ども扱いしないで」

「すまない。つい」

そういえば、前に何か引かなかったことがあった。ええと。そう。

「前の僕も年下なんでしょ。やっぱり、今みたいに頭を撫でたりした？」

スレインは首を振り、右下に視線を送った。

「…いや。可愛くないやつだった。いつも理屈ばかり捏ねて、口が達者でおせっかいで、無表情を決め込んでいる割に怒っているときは分かりやすくて…」

「…そうなんだ」

自分でも驚くほど、冷たい声が出た。でも、仕方ないと思う。僕が目の前にいるのに、違う人の話をするんだから。

初めに聞いたのは僕だけれど、そんな顔で。そんな声で。まるで知らない人みたいだ。

「ごめん、伊奈帆」

「それ、僕の名前？それとも前の？」

傷を辿る手を包まれた。同じくらいの大きさだけれど、まだ僕の方が小さい。よく見たら、皮膚の色と同化した小さな傷跡がたくさんあった。

遠いところで戦争があつて。

銃を持って。

人を殺した手。

信じられない。

「君は伊奈帆だ」

「うん」

今度は、素直に頷くことができた。僕に話しかけている。スレインの両手が僕の手を、しっかりと握った。僕の右手を中心にして組まれた手が、持ち上げられてスレインの額に当たった。頭を垂れて祈るように目を閉じている。睫毛の直線が綺麗だった。

「ちよっと違う。でも、伊奈帆だ」

「僕は僕だよ」

左手をスレインの額に寄せられた手に重なる。全部の手を間にして、瞳が交錯した。今は、僕を見ている。ここにいる僕のことを。

「僕はここにいますよ」

「……伊奈帆」

重なり合った四枚の掌が、そのまま溶けてくっついて一つになればいいのに。そうしたら、

もう僕しか見えないのに。

「ねえ、僕を見て」

「あ…」

「スレインの知っている僕じゃないかもしれないけれど、僕は君が好きだよ」

碧の光彩が小刻みに揺れて、唐突に白い頬を涙が幾筋も伝い落ちた。なぜだか受け止めようと重ねていた手を解き、顎の下へ両手を差し出す。ぽたぽたと滴り落ちた雫は、手の中に落ちた途端消えてしまった。

「スレイン…」

目の前で、胸を掻き抱きしゃくりあげて泣いている。どうしたらいいのだろう。

「泣かないで」

せめて肩を抱こうとするのだけれど、それが躊躇われるくらい一人きりで泣いている。触れるのが怖い。なんだか、壊れてしまいそうで。

「ねえ、泣かないで」

どうしたんだろう。何があったんだろう。何か、変なことを言ったかな。

「スレイン」

首に衝撃があつて、後ろに仰け反った。そのまま背中から倒れて、ソファの座面に後頭部が落ち込む。スプリングが一度跳ね、そして沈んだ。

暗い天井。

影の模様の壁。

湿った空気

雨の音。

雨の匂い。

肌の温度。

温かい。

なんだ、思ったより重い。良かった。

首に巻き付いた腕は肉が薄くて。

視界にちらつく金の髪。

わかった。

そうか。月の色なんだ。

行き場のない両手を背中に回す。素肌の感触に手が強張った。そういや、彼、服を着てないんだ。ゆっくり触れた素肌は乾いていた。背骨がある。肋骨がある。両手で、浮き出た肩甲骨を何度も確かめる。ここに翼がないのが不思議だった。

「天使かと思ったんだ。君が空から降って来た時」

背中の肌も、でこぼこしていた。こんなにたくさん傷がある。見えない心には、どれだけたくさん傷があるんだろう。

「人間なんだね」

雫が顔に当たり、すぐに消えてなくなった。視野を埋め尽くす碧。光彩の模様一つ一つまではつきりと見える。ひび割れたガラス玉のような目。大きな黒い瞳孔に吸い込まれそう。睫毛が重なり、瞼を閉じる。重なり合った口の中は生きているみたいに熱かった。

このまま、一緒に消えてしまえないだろうか。

雨の音と君のなき声。

雲が空を覆い。

太陽は去り。

月は隠れて。

雨が夜を塗り潰す。

真つ暗な部屋で君の目だけが美しく輝いて見えて。その目の中は雨を閉じ込めて。何度も名前を呼んで、何度も声を失った。最後に君は、僕の名前を呼んで、そして。さようなら、と言った。

目が覚めると、雨の匂いがした。室内はどんよりと暗い。

冷たい壁。湿った空気。生温い布団。

雨の音。

誰もいない。

「スレイン？」

飛び起きる。返事はない。

カーテンを開けて、窓の外を見る。雨だ。大降りだ。

「スレイン」

スリッパも履かずに狭い部屋を走り抜ける。リビングのソファ。キッチン。洗面所。バスルーム。トイレ。いない。玄関も開ける。

土砂降りの雨。遠くの踏切の音が聞こえた。

いない。雨が降っているのに。

ドアを閉め、振り向く。がらんとした部屋。暗くて、寒くて、湿っぽい。

「どうして…」

雨に溶けて消えてしまったのだろうか。玄関先の靴を跨ぐ。僕のが三つとユキ姉のが三つ。

今日、もう一足帰ってくる。

そういえば、初めてスレインが消えた時。あの日もユキ姉は出張でいなかった。靴の数はあの時より増えた。

少しだけすり減ったローファーを見下ろす。この靴を初めて履いた日も雨だった。傘を差し、一緒に桜を見たっけ。

「さよなら、って」

昨晚の、最後の言葉を思い出す。さようなら、って言った。多分、僕はそれを聞いて、明日も雨なのに変なことを言うって思ったんだ。僕は何て言ったっけ。

「さよならって、言われてもさ」

記憶の中の雨の音がごうごうと耳の奥でうるさい。足の甲が顎から落ちた水滴で濡れた。

雨の中、黒い雨傘が転がった。

「大丈夫ですか!? お怪我は!？」

前を見て歩いていなかった。尻もちをついた僕に、傘の持ち主は手を伸ばした。傘は向こうに転がっている。柄を上にして転がった傘は、黒い生地の内側に雨粒を受け止めていた。

視線を上げると、そこにあったのはあの碧。とても寒い場所の湖面の色。心配そうな表情で、見たことがないくらい大きく見開いた目。

頬に水滴が落ちた。

冷たい。

雨だ。

見ると濡れてる。髪も肌も服も。差し出された手を見る。静脈の浮き出た白い手。でも。知らない。この手は知らない。

「別に」

雨の中、君が僕とぶつかった。

雨が落ちる髪と肌。

昨日まで、一緒にいたのに。

知らない表情。知らない声。

知らない手。

誰？

「失礼します」

「彼が今日からこの教室で共に学ぶことになった、トロイヤード君だ」

「スレイン・トロイヤードです。よろしく願います」

「あつ、君は：今朝ぶつかったオレンジ色の：」

「ああ、あの時のコウモリ」

「コウモリじゃなくて、スレイン・トロイヤードです」

知ってるよ。そんなこと。

隣の席に座る彼から目を離す。誰にも聞こえないようにため息をついた。

スレインって、呼びたくない。

だって、違う。話し方も、表情も、目の温度も。全然違う。大体、声が大きいいし言うことは馬鹿っぽい。それに、あと年も違う。

本当に、違う。

授業が始まった。何か聞こえる。オレンジ色？それ、僕のこと？教科書がないって？知らない

いよ、そんなこと。まあ、別に見せてあげてもいいけど。

机がくっついて、感謝の言葉が降りてきた。頷いて見上げる。

全く、全然違う。

でも、そうだな。

笑顔だけは、似ていなくもない。

「コウモリ」

「だから、僕はコウモリじゃありません」

「購買部、気をつけた方がいい」

「へ？」

「焼きそばパンには、手を出すな」

「焼きそばパン？」

ああ、イライラする。でも、目が離せない。スレイン。スレイン。スレイン。全然違うのに、

同じなんだ。

そうか、こんな感じだったんだな。スレインも。

それで、きつと気づいたんだ。

同じだけど違うって。

僕じゃないって。

だから、また探しに行ったんだ。

さようなら、って律義に言い残して。そういや、そんなこと言ったっけ。聞いてたのかな。

もういない雨の来訪者を思い、ため息をついた。

伊奈帆は窓の外に目を向ける。雨が上がり、白い雲が浮かぶ。腹が立つほど能天気な青い空。

鳥が窓の枠線を横切った。

「消えないんだな、君は」

教室の窓から見た山の向こうには、大きな虹が架かっていた。

雨の底で靴を無くした君と二人思い出話に花を咲かす

伊奈帆 (19) × スレイン (20)

寒い。暗い。あと。

なんだろう。この。

におい。

植物と土の混ざった、水のおい。

「気がついた？」

「…伊奈帆？」

目を開けると、伊奈帆の心配そうな顔が近くにあった。その髪も顔も濡れている。それで分かる。

ああ、これは雨の匂いだ。

「気分は？」

聞かれて、数度瞬きをして首を振る。少しくらくらす。あと、寒い。いつもの囚人服は濡れて体に張り付いている。靴は片方しか履いていない。手の平に、石が組まれた地面の硬い感触があった。

「少し寒い。お前は？」

伊奈帆は表情を緩めた。彼の服も布地の裏まで濡れている。重そうな軍服の上着は裾から雫が落ちて、黒っぽい色に変色していた。

「僕も寒いかな」

ざあざあと、雨が規則正しく世界を打つ。見上げると、石造りの天井。ところどころ崩れて、その下には水が流れ落ち、水面が曇った鏡のように光っていた。ひび割れた石造りの床には濁った水たまり。足跡。点々と残る雫の跡。

赤い点。

「ここは、どこ？」

「さあ」

不思議なことに、この建物には壁がない。たくさん柱が等間隔に並んでいる。古代ギリシアの神殿のような作りだが、細部が異なっている。きつとこの場所を作った人々にとっては特別な場所だったのだろう。雨に包まれた風景は靄がかかったように朧だ。緑の木々、土の地面。そういうものが夢のように輪郭を曖昧にして雨

の中に溶け込んでいた。大きな柱に支えられた天井が雨粒を受け止め、僕らの上には届かない。

雨が降り。雨が集まり。雨に沈む。

雨の底にいるようだ。

「このまま、雨が降り続いたらどうしようか」

伊奈帆が柱の外を見つめながら言った。独り言かもしれないと思うくらい、茫然とした声音だった。

「世界が雨の底に沈むとは、神話的だな」

スレインは伊奈帆の手を握った。冷たいが、どくどくと血管の収縮を感じる。生きています。目を閉じる。じん、と奥の方が熱くなった。喉が引きつって体が軋む。

生きています。

彼も。僕も。

今は。まだ。

「ノアの箱舟が、拾ってくれるだろうか」

伊奈帆がスレインの手を握り返した。力強い手は、濡れていた。彼の手の色
が、雨水と混ざり合い雫となつてスレインの胸元に染みを作る。

点々と、涙のような赤い雫。ペンダントの鎖が赤く染まった。

七日七晩の大洪水から、ノアとその家族を救う方舟。番の動物たち。職人たち。
新たな天地創造を行うための、神の気まぐれ。

そういえば、この男の名前はノアに似ている。

「お前は、乗って行け」

「やだよ」

呼吸が止まった。塞がれた口の中は熱かった。今まで、何度も何度も繰り返した
この行為。もう最後かもしれないと思うと、手が伊奈帆の頭の後ろに伸びた。髪を
撫でる。濡れていた。こいつ、僕が触るときはいつも濡れた髪をしている。

いつからだったつけ。こいつのことを名前で呼ぶようになったのは。

唇が離れ、目を開けると伊奈帆が笑った。晴れやかな、幼い、明るい笑顔だった。

「一緒にいこう」

視界がぼやける。泣くのなんて、久しぶりだ。前に泣いたのは、もうずいぶん前。その時、伊奈帆は目の前に座っていた。

この男には、泣き顔を見られてばかりだ。

「…ああ」

彼の肩に腕を回すと、手を握られ肩を支えられた。よっ、という掛け声に合わせて立ち上がる。足を動かす。右、左、右。地面を蹴った感覚はない。もう痛みもない。

「ねえ、合言葉を決めておこうよ」

「合言葉？」

雨の境界で、伊奈帆が言う。無数の雨粒が大きな水たまりに吸い込まれていく。

下を見る。こんなに大きな水たまりは、初めてだ。だって、底が見えない。

「また会えた時のためにさ」

ぽつりと呟かれた声は迷子の子どものようで、安心させたくて名前を呼ぶ。優しい声が出せたと思う。伊奈帆は上を向いた。彼の鼻先数センチを、雨の線が通り過

ぎていく。直線的な雨が世界を遮断する。

「夢か。来世か。幻か。もしかしたら地獄だったりしてね」

それなら、自分はきつと地獄だろう。伊奈帆に地獄は似合わない。

「行き先が分かれるかもな」

右肩の手に力が込められたのが分かった。垂れた腕を持ち上げて、軍服の胸倉を掴んで握る。その上に、伊奈帆の左手が置かれた。温かく濡れている。

「だからさ、決めておこう。また会った時に、間違えないように」

合言葉。二人だけの言葉遊び。ある言葉を思い出した。今では前世のように遠く感じるあの頃。まだ、お互いの顔も名前も知らなかった。分かるのは、ノイズ交じりの声だけ。

「あれにしよう」

神様に、ノアと間違えられては困る。僕にしか分からない呼び方。初めて呼んだ。まだ、敵でも味方でもなかった頃の呼び方。

「オレンジ色」

伊奈帆が大きく頷いた。目が嬉しそうに細まる。

「そうきたか。じゃあ、コウモリ」

初めて呼ばれた時は腹が立ったけれど。今ではなんだかくすぐったい。

狭いコックピット。空を飛ぶ戦闘機。古めかしい操縦桿。握りしめ、踏みしめ飛んだ。海の上を。雲の中を。夕焼け空の向こうまで。そこで見つけたのは夕日よりも鮮やかなオレンジ色の戦闘機。一度だけの不思議な共闘。

それが出会い。

ああ、もうあんなことはできない。

だって、もう変わってしまった。

彼は目を失い、僕は――。

「コウモリ」

その名前を、かつて聞いたことのない声で彼は呼んだ。記憶が塗り替えられる。それに応えよう。

「オレンジ色」

しん、として、目が合ったのは同時だった。あの頃よりずっと大人びた顔を互に見つめ合う。こんなに長い付き合いになるなんて、知らなかったな。伊奈帆が胸の上で重なった手の指を分けた。指の間に指を組んで、力を込めて握る。

離れないように。離さないように。

「ああ、懐かしい。じゃあ、決まりだな」

「うん。ねえ、スレイン」

珍しい、迷ったような言い方に、顔を向ける。伊奈帆は自分の爪先を見ていた。つられて見た軍靴。汚れている。こびりついた雨と、泥と、人の血。

「まだ何かあるのか？」

うん、と茶色い髪が揺れた。その髪は雫を垂らして濡れている。この濡れた髪を、何度も拭いてやった。

「今度会った時はさ、友だちになろうよ」

意外な申し出に、しばらく返事ができなかった。三度ほど言葉を反芻して、思わず吹き出す。

「今更だな。もう僕ら、キスもセックスもしたっていうのに」

変なやつ。そう言うのと、伊奈帆は頬を赤くした。

「うん。それもいいんだけど、君と友だちになって遊んでみたい」

「友だちか」

友だちって、どんなことをするんだっけ。

「一緒に勉強したり、ご飯を食べたり、遊びに行ったり」

「…そういうの、したことないな」

伊奈帆は寂しそうに笑った。

「楽しそうでしょ」

「そうだな」

悪くない。そういう、どうってことない、ステレオタイプの日常。本や映画でしか、見たことがないような。

僕らには無縁の。

…ああ、もう消えそうだ。

そろそろ行こう。

「じゃあ、伊奈帆」

「うん。スレイン」

「せーの」

体を前方に投げ出す。

雨の底で、大きな飛沫が上がった。

だれもない廃墟で、雨だけが生きていた。雨は静かに降り注ぎ、赤い足跡と一つ転がった靴を雨の底に流し落とした。

世界は雨の底に沈み。

月は消え。

船は飛び立つ。

楽園は遠く。

雲は風に攫われる。

地上百十一メートルの観覧車で聞く花火の音は
銃声に似ている

軍神 (19) in 伊奈帆 (15) × スレイン (16)

これは一体どうしたことだろう。

雨の音で目が覚めた。初めに思ったのは、ここはどこだろう。次に、そんなはずはない。ベッドから起き上がり洗面台へ向かった。

鏡に映った自分の顔を界塚伊奈帆は両の目で凝視する。右も左も肉眼だ。寝癖のついた髪。皺の寄ったパジャマ。鏡の中でこちらを見返す顔は目を丸くしていた。そんな大きな目をしていたっけ。僕は。

「若いなあ」

かつて軍神と呼ばれた青年は、らしくもなく独り言を言うくらいには動揺していた。

「おはよう、伊奈帆」

「おはよう」

懐かしい制服を着て、いつか失くした手提げ鞆を背負い、小さくなって捨て

たはずのローファーを履く。玄関先に無造作に立てかけてあるビニール傘を広げた。金属の錆びた臭いに顔を顰めつつ、記憶にある道を辿る。破壊されて、もうないはずの道。見るはずのない光景。いないはずの人々。隣を歩く幼馴染の韻子も、今の伊奈帆には就学前の子どものように幼く感じられた。周りを歩いている同じ制服の子どもたちを見る。明るくて、嘘かと思うくらい元気で翳りがない。

血も、戦いも知らない子どもたち。

年よりじみた感傷をこそりと笑い、ゆっくり瞬きをした。変わってしまったのは自分か。

異邦人。

どうやら、変なところへ来てしまったようだ。こうなった経緯を考えるが、頭の中は靄がかかったようにぼんやりとしていて、まだよくわからない。

どこかに彼と一緒にいたように思うのだけれど、と腐れ縁の不健康な顔を思い浮かべる。見返す目。面会室でも、独房でもないどこか。彼はいつもの服を

着ていたけれど。

濡れていた。

ああ、そう。濡れていた。雨が降っていたような気がする。

まあ、そのうち分かるだろう。もしかしたら、夢かもしれない。

伊奈帆は空を見上げた。薄汚れたビニールの向こうは、分厚い雲に覆われて灰色だ。雨粒が弾ける。こうして内側から見ると、傘を差すのもなかなか面白い。

夢か。

どちらが夢なんだか。

横断歩道を渡り切り、韻子が手を振った。知り合いか。

僕の知っている人だろうか。

「おはよう、スレイン君！」

その言葉に伊奈帆はぼっと顔を向けた。あんまり勢いよく首を動かしたものだから、ぐき、と変な音がした。この体、運動不足なんじゃないのか、と舌打

ちをして、視覚と聴覚を韻子の声の先に集中する。

何だって？今、なんて言った？

スレイン？

「あ、おはようございます。網文さん。あと、オレンジ色」

黒い傘の下から、懐かしい声がした。記憶にあるより少し高く、元気で、子どもっぽい声。でも、間違いない。彼の声だ。声の主を見る。

スレインがいた。

伊奈帆の涙腺が緩んだ。顰め面で堪える。

いた。いた。ここにいた。生きている。手を振っている。

肉眼の両目で彼を瞳に捕らえるのは初めてだ。焦点を合わせて、網膜に焼き付ける。

淡い金の髪。白い肌。流水のような碧の瞳。記憶の中の彼と同じパーツだ。

しかし全体的に丸く幼いフォルムをしている。随分と若い。それと。

同じ制服を着た彼の姿を頭から爪先まで視線を数往復させる。

どうしてそんな間抜け面なんだ。ぼーっとして、へらへらして。健康そのものの姿。牢獄で痩せ細り、瞳をぎらつかせていた彼とは別人のように見える。

『月に置いてきた』

『お前の話だって面白くない』

チェスの駒に伸ばされた、固そうな指先。

襟元から覗く傷跡。

伸びっ放しの乱れた髪。

たった一つ彼に残されたペンダントの光沢。

暗い瞳の、深い色彩。

掠れた低い声。

その声で呼ばれる名前。

——界塚、と。

伊奈帆は目を閉じて思考を切り替えた。

もしも戦争がなければ。

人を、殺さなければ。

本来の彼はこうだったのかもしれない。案外、詰めが甘いを知っている。

「オレンジ色？」

「伊奈帆？どうしたの？」

「いや、何でもないよ。おはよう。スレイン」

「え…」

スレインと呼ばれて、スレインに違いない少年は動きを止めて伊奈帆を見た。

「何？」

スレインは左右に目を泳がせ訝し気に言う。そんな彼は見慣れない。

「いえ…君に名前を呼ばれるのは初めてだから、ちょっとびっくりして」

それは知らなかった。

「いつも、なんて呼んでたっけ」

「コウモリって」

その呼び方は心当たりがあるが、このスレインをなぜそう呼んでいるのか分からない。

『じゃあ、決まりだな』

あと、どうしてだろう。今、とんでもない間違いをしたような気がする。
鼓動が速い。

「あ、そうか。コウモリ、おはよう」

「あ、はい。おはようございます」

スレインの目が不思議そうに上を向いた。

「どうしたの？」

「今日は、レインコートじゃないんですね」

「ああ、いけない？」

「いえ。珍しいなって思っただけです」

「行こうか。遅刻する」

「はい」

三つの傘が並んだ。黒い傘の下を横目で見る。思いがけない明るい笑顔に、頭より先に心臓が返事をした。

懐かしい教室で、席に着く。同級生の中には、カーム、ニーナ、そして起助がいた。起助。生きている。彼の能天気な声を聞いて、伊奈帆の涙腺がまた緩んだ。全く、こんなに感情的なのは自分らしくない。

ふと思いついて教科書の内容を確認する。火星に人が住んでいないことがわかった。

この世界の人類は、地球人しかないのだ。

一つ不思議なのは、この学校の名称だ。新芦原高校だと思い込んでいたが、アルドノア学園というらしい。なんとというネーミングだ。教科書の何処を見てもアルドノアという単語は出てこないというのに。この世界では、アルドノアというのは火星の超文明ではなく、地球の、ユーラシアの、日本の、東京の、新芦原にある私立高校の一名称に過ぎない。

なんだ、それ。

道理で、と伊奈帆は教室を見渡す。ライエ、エデルリッツ、そしてアセイラムがいた。伊奈帆が元いた世界で火星生まれだった人々は、この世界では地球人として存在しているらしい。

「おはようございます。スレイン」

「アセイラム姫！お、おはようございます！」

「ちょっと、気安く話しかけないでくれる？アセイラム姫様は…」

「す、すみません。嬉しくて、つい」

「エデルリッツ」

「だつてえ」

少し離れたところで、アセイラムとエデルリッツ、スレインがしょうもない話をしている。伊奈帆は空気のあまりの軽さに拍子抜けした。

なんだ。

なんという。

なんという、平和な世界だ。

チャイムが鳴った。現れた教師は、伊奈帆の記憶では死んだ男だ。彼も生きている。

「では、授業を始める」

「レムリナさん」

「あら、スレイン。おはようございます」

二限目が終わり、次の教科の特別教室へ移動する途中でスレインが女生徒に

声をかけた。伊奈帆はおや、と片眉を上げた。

桃色の髪と眦の下がった大きな目が可憐な印象の少女だ。彼女はスレインの顔を見て嬉しそうに頬をほころばせた。鼻根目に見ても、頬が赤くなっただのが分かる。スレインは膝について彼女と話している。

「おはようございます。どちらまで？」

「第三音楽室よ」

車椅子にかけられたバッグから、楽譜と教科書、小ぶりのアタッシユケースが覗いた。ここは北棟の二階。特別教室棟は渡り廊下の先だ。

「東棟の四階ですね。僕たちも教室移動なんです。ご一緒しましょう」

「ありがとう」

自然な感じでスレインの手が彼女の車椅子の押手を握った。伊奈帆を振り返って小さく笑う。

「オレンジ色、先に行ってください」

「…そうするよ。それ、持って行ってあげる」

「あ、ありがとうございます」

次の教室は西棟二階の第一理科室だ。スレインは多分、彼女を第三音楽室まで送り届けてからやってくるのだろう。伊奈帆は荷物を受け取り、大股で彼らから遠ざかる。次の教室が次の渡り廊下のＴ字路を反対に曲がるとは知られたくないだろう。

あの人とは多分、元いた場所でアセイラム姫の身代わりをしていた偽物だろう。

『トロイヤード伯爵を夫とし』

結婚していたのは知っている。利用しただけと彼は話していたけれど。

窓の外を眺める。雨は上がり、雲間から日が差し込んでいた。校庭の木が揺れていて、少し風が吹いているのがわかった。きっと、すぐに地面も乾くだろう。

雨上がりの好天は、世界が輝いているように見える。

利用しただけなんて、そんなわけないか。

彼女のことを愛していたわけではないかもしれない。でも、心を許した存在ではあったのだろう。あの手の置き方。寄り添い方。それを受け取る彼女の微笑み。

たとえ彼が他の人を愛していたとしても、かまわないのだ。

刺さって抜けない棘に、困ったわ、と眉を寄せて笑う。

その笑い方は、伊奈帆のよく知るスレインに似ている。運命に殉じるその微笑み。諦め、捨てて、奪われて。それでも、ただ一つ信じることを選ぶ。

「お似合いだな」

そういう未来もあったのかもしれない。しかし、もう選択された後なのだ。

「スレイン様、お昼をご一緒してもよろしいですか」

「はい。もちろんです。お弁当ですか？」

「いえ。今から購買部へ買いに行くところで」

「僕もです。一緒に行きましょう」

久しぶりの学生生活でノスタルジィに浸っている場合ではなかった。四限目終了のチャイムと同時に、長身の同級生がスレインと一緒に教室を出て行くのに気がついた。

「韻子。あの人、名前何だっけ」

「伊奈帆、今日はどうしたの？ハークライト君だよ」

「ハークライト……」

確か、火星騎士。戦時中のデータでは、ザーツバルム伯爵の元で働き、その後スレインの右腕として下級兵士たちを束ねた火星第三階層出身の実力者だ。

そういえば、教室移動でも彼を巻くのに骨が折れた。

「あの二人、仲いいの？」

韻子に聞く。彼女の目が伊奈帆の視線を追った。

「スレイン君とハークライト君？うーん。そうだね。いつも一緒にいるよ」

「いつも？」

立ち上がった拍子にガタリ、と思いのほか大きく椅子が鳴った。学生鞆から財布を取り出す。

「あ、伊奈帆？」

「僕も購買に行ってくるよ」

韻子が目を瞬いた。今日はそんな顔をよく見る。韻子は分かりやすいな。

「いつもお弁当なのに珍しいね。もしかして、寝坊した？」

「そんなところ」

教室を出ると、伊奈帆は購買めがけて駆け出した。

案の定、人がごった返す購買部でスレインは途方に暮れていた。伊奈帆は蹲るスレインを仁王立ちで見下ろした。

「コウモリ。手を貸そうか」

「オレンジ色？どうしてここに」

「何なんですか、あなたは」

ハークライトを一瞥して、伊奈帆はスレインにさらに一歩近づく。なかなかいい光景だ。上から見下ろすなんて滅多にできない。もっと伸びる予定だったんだけどな。身長。

「購買部。そこは戦場だ。たった一人で勝利を手に入れることはできない」

「なんだか、今日のオレンジ色は少し変ですよ」

スレインが不審そうな顔で伊奈帆を見上げる。その顔はよく知っている。そんな顔でも、こっちを見るだけかもしれませんと思ったものだ。懐かしい。

「ともかく。共闘だ。ターゲットは焼きそばパン」

「ええっ!？」

「…何？」

全く、声が大きい。それに高い。一言で言うとは煩い。以前はもっと大きな声で、せめて聞こえる声で話せと何度も言ったものだが、両極端すぎる。中間は

ないのか。中間は。まあ、べつに嫌じゃないけど。

「前にオレンジ色、焼きそばパンには気をつけろって言ってたじゃないですか」
そんなこと言ったのか。この世界の焼きそばパンは一体何なんだ。

「過去に囚われていては、前には進めない」

スレインとハークライトが目を見合わせた。

「なんかちょっといいこと言ってますね」

「ええ。言っていることだけは」

伊奈帆はハークライトを睨みつける。彼は威勢よく睨み返してきた。結構やるな。

「君も協力するんだ。嫌とは言わせない」

「何ですって」

「さもないと。昼食抜きになるぞ」

「ぐ…」

勢いよく振り向く。購買か。いつもお弁当だったから、利用するのは初めて

だ。ちょっと嬉しい。やっぱり、焼きそばパンだな。あと、フルーツサンド。

「さあ、始めようか」

腹も減った。早く買って、一緒に食べよう。おまけがいても構わない。

「明日から修学旅行だ。くれぐれも、羽目を外しすぎないように」

ホームルームでさりと告げられた近未来に、伊奈帆は腰を浮かせる。スレインがびくつと肩を震わせてこちらを見た。

修学旅行だって？

伊奈帆は脳内の記憶の辿る。修学旅行。確か、ユキ姉が呼んだ漫画にあった。修学旅行とは…。

あれか。自由行動で木刀を買うとか、露天風呂で女湯をこっそりのぞくとか、枕投げとか。見回りに来た先生から隠れるために一つの布団で密着したりするとかいう、あの修学旅行か。

配布された簡素な冊子を見る。白黒一色刷りで、大きく旅のしおりと書かれていた。

なんという平和な…。

修学旅行？そんなの、行ったこともない。

バスの席次表やグループ行動について、旅館の部屋割りが発表される。伊奈帆はホチキス留めのしおりを捲り、確認する。細々と、まめなことだ。あるページで目が留まる。

自分の同室はカームと起助。

なんだと。

スレインは？

スレイン・トロイヤードの名前の下に、ハークライトという文字があった。

伊奈帆は斜め三つ前方に座る長身の同級生を確認する。あいつ。

昼休みにはついむきになってしまった。スレインが止めなかったら、今頃不良のレッテルを貼られていたかもしれない。

手に力がこもり、旅のしおりに皺が寄った。

どうして僕が同室じゃない？

このままでは、スレインと枕投げも、一つの布団で悪戯もできないじゃないか。この機を逃したら、絶対にできない。自分の知っているスレインなら、すぐく面倒くさそうなため息を一つして終わってしまう内容だ。相手にもされない。

やってやろうじゃないか。

「オレンジ色！」

「悪いなスレイン」

「おっじゃま」

「カームさん…起助さんまで」

「一体何事、ですか…？」

「詳しい話は後だ」

「とにかく、今からこの部屋を、僕らの作戦本部とする！」

「ええええええええええ!?」

閑話休題。

「でもやっぱり海パンはねえよな、海パンは？」

「そうだと思う」

「温泉だぜ!?!な!?!」

「そうだと思う」

起助たちの会話に適当に相槌を打ちつつ、伊奈帆は売店で買った瓶を傾けた。冷たくて甘い液体が喉を通り抜ける。

フルーツ牛乳なんて、初めて飲んだな。

旅館の大きな窓から、澄んだ青空が見えた。微かに見える、白い円。

真昼の月。その形は、記憶と違う。

ここも、悪くない。

戦争はない。みんな生きていて、仲が良くて、嫌なことなんて何もない。悪意のない世界。ぬるま湯のような日常。悪くない。

でも。

「オレンジ色！また!？」

「よう！」

「やっほー」

「今度は、一体何事ですか」

「勘が悪いな」

「風呂上がりに敷かれた布団。消灯時間まであと三十分。あとは寝るだけ。この状況ですることと言えば、一つしかないだろう」

伊奈帆は枕を片手に目を左右非対称に細めてにやりと笑った。

「枕投げだ」

いつか終わる夢だとしても、楽しいことには違いない。

「騒がしいですね。ちゃんと寝ていますか？」

襖をノックする音がした。よく考えれば変な話だ。

「先生だ」

カームの声に、ハークライトは電気を消して起助は手近の布団を頭からかぶった。

伊奈帆はスレインの手首を掴んで引っ張った。

「うわ!？」

「しっ、静かに」

勢いづいて前のめりに倒れたスレインの横に身を滑り込ませ、掛け布団を掛

ける。「寝てますか？」というマズールカの声が布越しに聞こえた。誰も返事をしない。まだ襖は閉まらない。話声がある。誰か通り掛かったらしい。

布団の中で息を潜める。ちよつとどきどきする。漫画になるだけはあるな。

「…あの」

「黙って」

「でも…」

「見つかる」

暗闇の中。呼吸の音が聞こえる。手首を放して、手を握る。握った手は柔らかかった。

同じ匂い。

スレインの匂い。

「…あの」

「静かに」

「…はい」

布団の中は真っ暗で、吐く息が滞留するくらい窮屈だ。硬い膝が触れる。重なった手の柔らかさ。さらさらした肌。柔らかい肉。綺麗な爪の形。目を閉じる。

銃で固くなった手の皮。

痩せて骨が浮いた指の硬さ。

触れた一瞬、反射的に逃れようと強張る手首の動き。

その向こうの不器用な笑顔。

ああ。

これは違う手だ。

違う人だ。

そうか。ここには、いないんだな。

「オレンジ色？」

知らず、頬が濡れていた。

何でもない、と言って、そのまま寝たふりをした。困ったように小声でスレインが僕を呼んだが、その手の温かさにいつしか眠ってしまった。

彼より先に眠るのは初めてだ。

『眠れないの』

『すまない、起こしたか』

『別に』

『…』

『悪い夢でも、見た？』

『…そんなところ』

『どんな夢？』

『昔の夢』

地名も知らない古びたバンガロー。外は雨が降っていた。真っ暗で、じめじめして、埃っぽくて、蜘蛛の巣が掛かって、多分虫もいる。まあいい。少なくとも、濡れずにすむ。それに、明日は別の場所で眠っているだろう。

『…僕も、小さいときは怖い夢をよく見たよ』

『…お前が?』

『うん』

『…そうか』

窓を開けておいたからだろうか。空気が湿って、水の中にいるような気がする。雨の匂い。

『そっち、いつでもいい?』

『なんで?』

『いいから』

布団の端から潜り込む。暖かい。向こうを向いた背中に額を寄せた。彼の匂い。鼓動。

『怖い夢を見た時には、姉貴の布団にもぐり込んだんだ』

スレインがくすりと笑った。

『：お姉さん？お前、甘えん坊なんだな』

『うんと小さい頃だよ』

腕を回す。くっついた体で、自分の心臓の音が聞こえる。この音が伝わっているかな。

『ほら。生きてる。世界の中で、生きてるんだ』

『生きているのか』

『生きてるんだ。生きてて、いいんだ』

スレインは首を振った。

『わからない』

『もう、寝よう』

手探りで手を握る。指先が硬い。皮膚の硬さが違うところがある。細かい傷跡。冷えた指先と、温かい手の平。

『二人で遊園地に行こう。九時に池袋駅に集合』

相手は一歩的に通話を切った。ツー、ツー、という音を耳から離す。スマートフォンの日付と時刻をもう一度確認する。

「今日は平日ですよ…」

スレインは壁掛け時計を見た。七時五分過ぎ。次に窓を開ける。雲一つない快晴。

そっとリビングを覗く。誰もいない。お父さん、昨日は帰らなかったのか。

一つ溜め息をついて、筆笥の引き出しからジーンズとネルシャツを引っ張り出した。

「遊園地って、行ったことないな」

改札を出たところで、伊奈帆が片手をあげた。Tシャツにパーカーとジーンズ。彼も私服だ。ちょっと安心する。

「どうして遊園地？」

「君と遊ぼうと思って」

伊奈帆がこっち、と進行方向を親指で示した。乗り換えるらしい。東京の駅は迷路みたいだ。伊奈帆の後ろをはぐれないように付いて行く。

「他の人は誘わないんですか？」

「平日だよ。誘えるわけがない」

スレインは自身を人差し指で示す。

「僕は？」

「君は特別」

振り向いた伊奈帆はいつも通りの無表情だが、声はどこか楽し気だった。

「何なんですか？」

「いいだろ。こうして来てくれたんだから。行こう」

「まあ……」

すぐ電車が来た。それに乗り込む。平日の九時過ぎ。結構混んでいる。こういうのには慣れない。

「電車、初めて？」

「いえ。でもこんなに混んでるのは……」

「空いてる方だよ」

伊奈帆がこっち、と腕を引っ張った。座席の端に、縦の手すりがある。両手で掴まると、少し楽だ。

「一時間以上かかるから。気分悪くなったら言って」

「あ、はい」

なんだか変な感じだ。妙に優しい。

見ていると、目が合った。そうだ、お札を言わないと。

「ありがとう、オレンジ色」

「：別に」

そう言っ**て**ぶっきらぼうにそっぽを向き、ポケットからスマートフォンを取り出した。

なんだ。いつものオレンジ色だ。

道すがら、潮の香りがした。派手な塗装と形状のアトラクションが視界に大きく迫ってくる。

「入り口はこっち」

「あまり人、いませんね」

インフォメーションに近づく。窓口は、今は家族連れが数組並んでいるだけだ。

「君、来たことある？遊園地」

「ありません。転校ばかりで、こうやって遊ぶのは初めてで」

伊奈帆は歯を見せて笑った。いつもの彼らしくない笑顔に、ちょっとどきどきする。

「僕もない。いい機会だ」

「そうなんですか？なんか意外です」

「うん」

大股で歩いていく伊奈帆に、スレインは小走りについていく。カウンターのガラスの奥で、係員が困ったように微笑んだ。伊奈帆はポケットから財布を取り出し、抑揚のない声で言った。

「二枚下さい。はい」

唐突に目が合う。何だろう。伊奈帆が口を開いた。

「修学旅行の振り替え休日があって良かったよね」

「ええと……。はい」

わざとらしい言葉にしどろもどろで答える。係員がほっとしたようにチケット

トを差し出した。

そんなの、ないんだけど。

ゲートの係員に会釈をして、園内に入る。初めて見る光景。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫……。絵の具の色を全部使ったような鮮やかな建造物と、綺麗な装飾。大きくて、たくさん。

これが全部、遊ぶために作られたんだ。

「すごい」

思わず声を上げると、うん、と返事が聞こえた。見ると、伊奈帆も口元をほころばせている。

こういうの、好きなんだ。

「最初は何に乗ろうか」

園内は、貸し切りかと思うくらい人がいない。平日の開園時刻すぐだ。それ
も当然か。

「あれに乗ろう」

伊奈帆が顎を向けたのは、巨大な皿回しのような形状のアトラクションだった。円周に、一人乗りの座席がたくさんぶら下がっている。丁度回転を終えたところだ。

「空中ブランコ？」

「行こう」

ちよつと面白そう、と先を歩く伊奈帆に肩を並べる。

「ちよつと休憩しようか」

いくつかのアトラクションを制覇し、アルミの階段を鳴らして下りた伊奈帆は言った。スレインは頷く。

「面白かったね」

「はい」

日が高くなり、少し暑い。スレインは歩きながらシャツの袖を折る。

「オレンジ色、射的上手いですね。特訓したんですか？」

「そんなところ」

伊奈帆が笑った。彼は最近よく笑う、とスレインは思う。伊奈帆が首をひねり、スレインは視線を追った。園内の時計は正午まであと三分を表示していた。「もうお昼か。何か食べようよ。何がいい？」

「お腹が空いてるから、何でもいいから食べたいです」

「そう」

また笑った。あっちに売店がある、と指さす方向に足を向ける。

ホットドッグとポテト、コーラを買った。ベンチに座ってほとんど同時に齧り付く。

じゅわ、と肉汁が溢れてきた。ケチャップとマスタードの酸味がよく効いてる。

「美味しいね」

「はい」

伊奈帆は横目で、口いっぱい頬張る隣の顔を眺めた。美味しそうだ。

そっか。

食べることも、好きだったんだな。

「僕の顔に、何かついてますか？」

スレインが顔を向けて聞いた。余程じつくりと見てしまっていたらしい。

「うん。ケチャップ」

「えっ」

慌てて手で口の端を擦るが、取れていない。

「そっちじゃないよ」

今度は反対側を擦り出す。包みが手から滑り落ちそうだ。隙だらけ。伊奈帆は自分のホットドッグを齧る。どうってことのないファーストフード。でも、すごく美味しいと思う。

「取れました？」

「うん」

スレインがホットドッグ目がけてまた大きな口を開けた。

「美味しそうに食べるよね」

口に入れた瞬間に話しかけるのは良くなかったかもしれない。もぐもぐと口を動かしながら大きな目をこちらに向けている。ごくりと飲み込んだ喉の動きを見ていた。喉仏が浮かぶ首は白い。

「だって、美味しいですもん」

「そうだよね」

美味しいなんて言葉、彼から聞いたことないな。

「好きな食べ物って何？」

「好きな食べ物ですか？ホットドッグと、焼きそばパンと、あとクロッケパン」
「パンばかり」

嬉しくなって、ちょっと笑ってしまった。スレインは「あ」と人差し指を空

に向ける。

「ラーメンも好きですよ。修学旅行で食べたの、美味しかったです」

「あれね。君、おかわりしてたね」

本当に、この彼はよく食べる。あのスレインとは正反対にも見える。でも、そうじゃない。

「どうかしましたか？」

「何でもない」

ホットドッグ。焼きそばパン。コロッケパン。ラーメン。

好きなものは、誰かと一緒に食べたものばかり。そういうやつだった。

『好きな食べ物ってある？』

『別に』

『僕は卵焼きが好きなんだ。出汁巻き卵』

『聞いていない』

『火星では、食べ物の種類、ないんだっけ』

『クロレラとオキアミが主食だ。地球の食べ物は、王族であっても滅多に口にできない』

『そうなんだ』

スレインが顎をしゃくった。

『…こんなところでも、食事は火星よりずっと恵まれている。嫌な気分だよ』

『食べるんだよ』

『…』

面会室のテーブルの上には、冷め切った昼食。美味しくないのは、分らないではないが。

『それで今日は、君の要望を取り入れようと思って。好きなものなら、食べるでしょ』

『…肉は、あまり。あと、生の物は』

『うん。それから？食べたいものは？』

『サンドイッチがいい』

『具は？』

『ジャム。イチゴの』

『好きなの？』

『それくらいしか、思い浮かばない』

『わかった』

彼は表面が乾いたパンを手にとって、眉を顰めて噛みついた。

ずっと後で、思い出を聞いたんだ。

『一人で食事をして、味がよく分からない。砂を噛んでいるみたいな気分になる』

プラスチックのフォークを取り上げて、彼は笑った。そういえば、あ

の時間が初めてだったかもしれない。笑った顔を見るのは。

『お前みたいなのでも、いないよりいい』

『みたいなの、は余計だよ』

フォークに刺さった、黄色い一片。冷めているけど、美味しくできたと
思うんだ。

「あれ、それどうしたの」

トイレに行って戻ってきたスレインは、赤い球体をぶかぶかと頭上に浮かせていた。

「もらっちゃいました」

糸で右手と繋がれた風船を見上げる。青空を背景に、鮮やかな赤。持っているのは高校生男子。控えめに言っても、とても目立つ。

「風船で喜ぶなんて、子どもみたいだな」

歩き出すと、頬を膨らませて駆け寄ってきた。そんな顔、初めて見たな。

「あなたに言われたくありません。オレンジ色だって、さっきのお化け屋敷ではしゃいでたじゃないですか。お化けに話しかけるなんて、びっくりですよ」

「仕組みが気になってさ」

子ども騙しだが、それがかえて面白い。つい色々と聞いてしまった。奥が深い。お化けもなかなか大変だ。

「君、お化け屋敷で驚かないんだね。意外だ」

「作り物ってわかってますから。結構よくできましたよね」

意外といえば、意外だが、言いそうなことだ、

「夢のないこと、言うね」

ふと、気になった。

「君は、夢ってある？」

「え？」

「夢。こうなりたい、こうしたい、この人と一緒にいたい。そんな未来。あ

る？」

「…そうですね」

赤い風船を頭上に揺らし、しばらく黙って二人で歩いた。すれ違う人が何人か、赤い風船を指さした。スレインが口を開いた。

「そういえば、考えたことないですね」

「なんで？」

「なんでって言われても…」

でも、そんな気がした。

こんな世界でも。

笑って怒って泣いて、大きな声を出して。ご飯をいっぱい食べて。お気楽そうに見えるけれど、違う。

きっと、色んなことを諦めている。

今しか、分らないんだ。この人も。

こんなに平和なのに。幸せじゃない。

「僕たちは高校生だ。来年には卒業。その後は、何でもできる。何でも選べる。自由がある。すぐ先の未来だよ」

振り向く。スレインは数歩後ろで立ち止まっていた。澄んだ目でこちらを見ている。

「：そういうオレンジ色は、どうなんですか」

会話の流れとは裏腹に、感情の抑制された声音だ。目を瞠る。

これは？誰だ？

「どうということ？」

影が。斜めに伸びた建物の影が境界線のように彼を捕まえて。

「夢とか、あるんですか？」

静かな声。

誰の言葉だ？

「あるよ」

唇が開く。足を踏み出し、手を伸ばした。

「どんな？」

——ノイズ

『今度会った時はさ、友だちになろうよ』

『
』

糸を垂らした風船が、青空の中に吸い込まれていく。
建物の塗装がざらざらと手の平について嫌な感じだ。
「オレンジ色？」

壁と壁が作る濃い影の中に、両手と壁で閉じ込めた。
消えてしまうかと思った。

そうか。一人だと、こうやって閉じ込めるしかないわけだ。

こちらの両手は使えないのに、向こうの両手は自由なんだな。

どちらが閉じ込めているんだか。

少し顎を上げる。目が合った。

至近距離で立つと、ちょっと見上げる格好になる。これは以前からの面白くない事実だった。見上げた瞳が左右に泳いだ。ああ、そう。そういうのは、見たことがある。

「ええと、近い、です…」

か細い声が降りてきた。ちょっと拍子抜けする。さっきのは、何だったんだろう。瞳の奥を覗き込むように顔を近づける。

「嫌？」

「嫌っていうか…」

恥ずかしそうに身を縮めている。こんなのは初めてだ。いつもなら、胡乱気に見返して、そっと笑うんだ。その顔は好きだけれど、いつも胸に刺さった。

泣いているみたいだったから。

「ふうん」

「あの…」

目が潤んできた。視野を広げると困り果てた彼の手が胸の上で固く握られて
いる。その下には、何もない。そのことを思い出した。

「…やめた」

ぱっと手を離して、伊奈帆は後ろ脚で二歩下がった。ポケットに指を引っ搔
ける。

「君、かわいいね」

「え？」

「顔が赤いよ」

指摘するとますます赤くなった。くるくると変わる表情。見えていて飽きない。
なんだよ。

そんな風に、笑えるんじゃないか。泣けるんじゃないか。

「…こういうこと、誰かとしたことあるんですか」

身を固くしたまま、スレインが聞いた。目は自分の爪先を見ている。狭い通路は影が濃くて、少し先の地面とのコントラストが目には痛い。影のトンネルのような場所に向かい合う。

「スレイン以外で？」

「…ええ」

「ない」

即答すると、スレインがぱっと顔を上げた。伊奈帆は目を瞋る。

その顔も、似ている。

目を見開いて。口を薄く開いて。信じられない、という顔。

初めて好きだって言った時もそんな顔をした。

その後、なんて言ったっけ。

そう、「正気か？」って。失礼な話だ。人の一世一代の告白を。

「だったら…」

「君は、特別だから。朝も言っただろう」

踵を返して歩き出す。スレインは数歩後ろからついてきた。

「何なんですか」

「僕の夢はね」

通路を抜けた。影の外に足を踏み出す。眩しくて、暑い。暴力的なまでに鮮明に世界が見える。強い光で何もかも、しつこいくらい細部まで分かる。これは現実なのだと、思い知らせるように。

何が夢で、何が現実なのか。

「僕の夢は、今日一つ叶った」

『一緒に勉強したり、ご飯を食べたり、遊びに行ったり』

『…そういうの、したことないな』

「一つ？」

「次は、あれに乗ろう」

伊奈帆の指が一点を指し、スレインはその先を見上げた。

二人を乗せたゴンドラが小さく揺れる。その揺れ方は、手を離れた頼りない揺り籠のようだ。

静かな空間だ。薄い金属の壁を隔てて、世界の音が不鮮明に聞こえる。

窓から景色を見下ろす。地上がだんだん遠くなる。電飾や明かり、人の灯が床に零したミルクのように点々と見えた。

「日が落ちるのが、早くなった」

「もう、九月ですから」

九月も終わる。

「修学旅行、面白かったね」

観覧車の中で、伊奈帆は言った。スレインは昨日までの修学旅行を思い出す。

覗きは失敗するし、枕投げは顔面に的中して、お土産の木刀を転んで折った。帰りのバスでは置いて行かれそうになったし。

結構散々だったけれど、まあ。

「楽しかったですよ。あの覗きと、枕投げがなければ、もう少しましでしたけれど」

伊奈帆はくくくと笑った。

「悪ふざけがすぎたかな。ごめんね」

「……なんだか、殊勝ですね。珍しい」

「修学旅行なんて初めてだから、テンション上がっちゃって」

「まあ、誰でもそうですけどね」

伊奈帆はまた笑った。

今日のオレンジ色は、よく笑う。なのに不安な気持ちになるのはなぜだろう。ドアの隙間から、パレードの音が聞こえる。喇叭の音。太鼓の音。歓声。今日はこんなに人、いたんだっけ。

「今日はどうして、急に遊園地だなんて言い出したんですか？」

伊奈帆はおどけた風に肩眉を上げた。スレインは、彼のそんな顔は初めて見る。なんだか大人みたいな顔じゃないか。

「今日は楽しかった？」

「ええ、まあ」

「僕も、楽しかった。初めて乗ったよ。ジェットコースターも、バイキングも、メリーゴーランドも」

その言葉に、ちよつと笑う。

「普通、男二人でメリーゴーランドは乗りませんよ」

「そうなの？」

人が少ないと言っても、ゼロではない。係員の他、小さい子ども連れの家族やカップル、来場者たちにどのように見られていたか。

「さっきの質問だけだよ」

伊奈帆が座席の向かいからこちらを見た。穏やかな顔で、一度瞬きをした。

「はい」

「君と、一緒に遊んでみたかったんだ」

「僕と？」

「他にも、行きたい場所ややりたいことがたくさんあったんだけどね。一日で全部はできないから」

映画とか、海とか、登山とか、プールとか。ピクニックとかもいい。キャンプとか、そうだな、カラオケとかも。伊奈帆は指折り羅列する。

「なんで、遊園地にしたんですか？」

伊奈帆は窓の外を見た。

「高いところに、行きたくてさ」

「高いところ？」

「うん。高くて、静かで、僕と君の他には誰もいないところ」

観覧車。そういえば、今の高度はどれくらいだろう。もうかなり高いところまで上がってきている。窓の外は夜空が近かった。群青のような深い色に、た

くさんの星。星明りでゴンドラの中は青く光っている。

高いところに行きたいって？

「どうして？」

伊奈帆は唇に人差し指を当てた。愛らしい仕草に反して、不思議と鋭さを感じる佇まいだ。指の下で唇が静かに弧を描いた。

「内緒の話をするからさ」

ゴンドラが最高点に達した。上昇から下降へ、動きが変わる。

「内緒？」

下り始めたゴンドラの速度が今までより遅く感じられる。伊奈帆の背後の窓に、夜空を横切る飛行機の赤いライトが見えた。

「君は今、幸せ？」

「ええ、まあ。友だちもできたし、学校は楽しいし。父さんはあまり家に帰っ

てきませんけど」

「そう」

伊奈帆は背もたれに背を預け、手元を見て独り言のように口を開いた。

「同じクラスで勉強して、休みの日は時々遊んで。みんないる。韻子も、カームも、起助も。セラムさんも……君も」

こんなによく喋るやつだったっけ、オレンジ色は。しかも、こんな優しい声で。

「それが、どうかしたんですか」

伊奈帆は首を振った。

「いや。当たり前って、誰が決めるんだろう」

「？」

まん丸く見開いた目が鋭くこちらを見た。

「僕のこと、どう思う？」

「へ？」

茶化しているのかと思ったが、真剣な表情だった。慎重に彼の唇が動いた。

「嫌い？」

思わぬ言葉に吹き出す。全く、今日のオレンジ色はどうしたんだろう。

「嫌いだったら、学校さぼって一緒に遊園地に来たりしませんよ。学校をずる休みするなんて、初めてなんですから」

伊奈帆が笑った。やけに大人びた笑い方だ。

「脈はありそうだ」

今日のオレンジ色は、やっぱり変だ。いや、今日だけじゃない。少し前からよく笑うし。

唐突だし。

大人みたいなことを言う。

それに、傘を差していた。あんなに嫌いなのに。

あと。時々。

名前を呼ぶし。

別人のようだ。

背もたれに寄り掛かって、伊奈帆は首を逸らした。どこを見ているのだろう。

「いじわるばかりするだろう、僕は。君に」

「はい」

「君のいろんな顔を見たいだけなんだ」

「それって…」

「笑った顔、怒った顔、泣いた顔、楽しそうな顔、お腹がすいた顔、眠そうな顔」

伊奈帆は両目を閉じる。初日に見た教室での光景。平和きわまりない日常の場面。彼女を見つけて名前を呼んだ横顔。

「好きな人を、見る顔」

そんな顔、するんだ。

君がアセイラム姫を見る時の顔。そういえば、見たことがなかった。

「君は、よく笑う。よく泣くし、よく怒る。それと、よく食べる」

「それがどうかしたんですか」

「いや、僕の知っている君とは正反対だと思っただけ」

ぶっきらぼうで、無気力で。ご飯は食べないし。笑わない。喋らない。でも、よく怒ってたな。それは僕のせいかな。

「？」

「君を見ていると、嬉しいけれど少し悲しい」

伊奈帆はスレインの顔を見る。目を丸くして、不思議そうに話を聞いている。憎しみも、悪意も、悲しみもない。ただ、心配そうな気配が膝の上で握られた手から感じられた。

柔かい手。

この手は、もう握らない。

違う手なんだ。

「こんなに明るくて、表情豊かで、ちょっと抜けてて、底抜けに人を信じていて。あいつ、本当はこうだったんだって」

戦争がなければ。火星に行かなければ。月が割れていなければ。人類がアルドノアなんて、知らなければ。

すべてがゼロだったなら。

ここは、そういう世界。

「ええと」

スレインが困ったように目を泳がせた。伊奈帆は首を振る。困らせたいわけじゃない。

「僕の感傷は君の責任じゃない。月のせい」

「月？」

スレインは夜空を見上げる。今日の月は満月だ。赤い月。

「……なんだか最近のオレンジ色は変ですよ」

「うん。そうだね」

伊奈帆は寂しそうに笑った。スレインは、かける言葉を失って微笑んだ。困ったときに笑ってしまう。癖なのだ。

「君が」

伊奈帆は言葉を切って、唾を飲みこんだ。喉仏が上下に動く。そんなの、初めて見た。

「君がそうやって笑っていると、ほっとする」

何十年も年を取ったような笑い方で、伊奈帆は笑った。スレインは、その笑顔をぞっとした心地で見返した。

これは誰だ？

「笑っていると嬉しい」

「…恥ずかしいですよ」

伊奈帆は微笑んで、ゴンドラの窓から夜空を見た。

「月は丸いんだなあ」

「何の話ですか？」

月を見ていた目を閉じる。記憶の中の月が重なる。その輪郭は違う。

「そういう世界もあるんだなって」

雨の日には、見えない月。この丸い月を初めて見てから五日。わかったのは、この世界は平和だということ。そして、自分はこの世界の人間ではないのだということ。

ひとりぼっちだ。

「オレンジ色？」

「スレイン」

「はい」

「僕は、君の同級生の界塚伊奈帆じゃないんだ」

しんと静かな暗闇だ。パレードは終わったのだろうか。調子はずれのオルゴールのように、音楽が風に混ざり合い耳に届いた。

「驚かないね」

「なんとなく、そんな感じがしてましたから」

伊奈帆が頷いた。なんだろう。僕の言うことが分かっていたような反応だと思っただ。

「そういうところは、鋭い。矛盾を受け入れる。普段はあんなに鈍感なのにね」丸い月は赤い。大きさは変わらないはずなのに、だんだん大きくなるようだ。

「月が割れた世界から、君を探しに来ただけだよ」

「は？」

伊奈帆は自身の胸を軽く小突いた。その下には心臓がある。

「君にはこいつがいるみたいだから、別のところに行くことにする」

「どういう…」

言葉を待たず、界塚伊奈帆は笑った。別れの笑顔だとわかった。名残惜しうに結ばれる視線。橙色の瞳の色は深い。

唇を囁む。

そんな笑い方はずるい。何も言えなくなってしまう。

「これから僕と仲良くしてやって」

「ええ。…オレンジ色」

「うん」

一瞬の光に照らされた横顔は、鋭く優しい。遠くで、どおん、と音がした。

「どこに、行くんですか？」

「わからない」

音がする。何の音だろう。どおん。どおん、と。

「あなたは、何者ですか？」

「軍人だ。スレインを探して来た」

伊奈帆の目が細くなる。泣きそうな顔に見えた。

「でも、君じゃない」

どういふことだろう。僕の名前はスレインだけれど。

最近はずっと、名前を呼んでくれたのに。

「君もスレインに違いないけれど、それでもやっぱり違う」

また、どおん、と音がした。青い光は残像だ。

花火の音だ。

「僕は、どうしていなくなったんですか？」

「多分、手を離してしまったから」

一度は掴んで、もう離さないと誓ったのに。

「死んだんですか」

伊奈帆は目を閉じ項垂れた。顔を上げて、笑った。

明るい笑顔が、こんなに悲しく見えるなんて。

「そんなところ。…そういうところは、同じだ」

「そういうところ？」

伊奈帆の指が、自身の額を二度叩いた。

「すぐに殺したがる。自分を」

花火の音。どうして今日、花火なんて上がってるんだろう。もう九月なのに。

「会えるといいですね」

「サンキュ」

伊奈帆は目を閉じた。両目を。スレインはそれを、目を見開いて見ていた。

どおん。

どおん。

遠くの音が近くなる。

どおん。どん。——ドン。

——いつか、撃った瞳。

花火が上がる。それ以外に音はしない。

光る。光る。鉄の籠の中。赤。青。白。緑。黄色。

一瞬光って。

消えていく。

空に黒い煙を残して。

火薬のにおいを残して。

残骸を残して。

光は消えていく。

また上がる。

それは。

——いつかの、銃声のように聞こえた。

「：コウモリ？」

「伊奈帆。大丈夫ですか？」

スレインの声に、伊奈帆は目を瞬かせて周囲の状況を確認した。

「…観覧車？ええと…」

「…居眠りなんかして、寝ぼけてるんじゃないですか」

周囲を見渡して、目を擦る。窓の外を見て、花火、と呟いた。

「居眠り。そうかな」

「あなたらしくもない」

伊奈帆はスレインを見る。いつもの笑顔だ。眉尻が下がって、目が細くなつて、控えめに口が結ばれて。

そっか。

「…そう、君と遊びに来たんだったっけ」

「ええ。もう帰りましょう」

「そうだね。これが下に着いたら」

観覧車の窓から、花火が見えた。

一つ。

二つ。

三つ。

重なり、消え。また重なる。

光って、消えて。また光って。

「こんな空を、飛んだことがあるような気がする」

夢の中かな。

「夢だろう」

「夢かな」

夢って、何だろう。

また光る。目を閉じる。見えたのは。

海。

赤。

碧。

これも夢？

「もう、帰りましょう」

声に目を開く。薄暗い。夜の暗さだ。窓からもう空は見えない。

「うん。ああ、もう底に着く」

「ええ」

ゴンドラから踏み出された足が地面を踏んだ。右足。左足。右足。歩き出す。
沈まない。

生きている。

「きっと、明日は雨ですよ」

「どうして？」

そういう匂いがする、とスレインは言った。

「雨が降ったら、オレンジ色はレインコートを着るんでしょう？」

「コウモリは、傘を差すんだろう」

「そう」

「そうだね」

伊奈帆はポケットに両手を入れる。いつかだれかを受け止めた両手。重さな
んかないみたいだった。

雨に現れ、雨に消えた。

もういない。きつと、然るべき場所へ向かったのだ。

雨か、と呟く。確かに、いつもと空気が違うような気がする。

「明日は、君の傘に入れてもらおうかな」

「なんで？傘、持ってるでしょう」

こういうところが、面倒くさい。鈍感なんだ。お互い様かもしれないけれど。

「傘は嫌いだ」

「レインコートは？」

伊奈帆は大きく鼻を鳴らした。俯き加減で口を開く。ちょっと、正面向いて
は言えない。耳が熱い。

「……はつきり言うから、ちゃんと聞いて」

「はい？」

さあ、言うぞ。息を吸う。

「君のことが好きだから。迎えに来て」

返事がないので横目で見ると、目を丸くして、次に顔が赤くなった。良かった。通じたみたいだ。スレインがもごと口を動かす。

「……家の場所、知らないし」

「地図書くから」

押して押して押したら、いいっていうのを知っている。でも、この頬の赤さはちょっと自惚れてもいいのかな。

「いい？君の傘に入って」

「……いいですよ」

花火は、いつの間にか終わっていた。

誰もいない遊園地を、手をつないで歩く。暗くて、静かで、世界に二人だけになったみたいだ。街灯の光だけが現実を示していた。

いつの間にか、手をつないでいた。

暖かい手。

柔らかい手。

乾いた手。

フラッシュバックする、冷たい濡れた手。硬い手。震える手。

もう、濡れた髪を拭くことはないんだ。そう思うと、スレインは不思議と涙が零れそうだった。悟られないよう、俯いて歩く。背にした街頭で影が伸びていた。とても長い。先が見えないくらい。

あれ。

不思議だな。オレンジ色の髪を拭いたことなんかははずなのに。

「スレイン」

手が引かれ、次の瞬間お互いの光彩で視界がいっぱいになった。

二対の瞳。写り込んだ橙と碧。

えっと。

目を開けたままするんだ。こういうの。

「…なんで？」

触れた場所を指の腹で触る。唇は少しかさついていた。彼を見るときまり悪そうにジーンズのポケットに両手を突っ込んで足を踏みかえた。

「いや、だって」

口を尖らせて、その割に柔らかい瞳ではっきり口が動く。何を言うのか、わかった。

『好きな人にキスするのに、理由がいの？』

エピローグ

不思議な場所だ。色んな場所を探したけれど、こんなのは初めてだ。見上げた空は青色だけではない。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫。自分に認識できる色は七つだが、人によっては無数に展開する色の配列を眺める。雲はない。

足元に生きた植物の感触を感じる。青臭い匂い。足の裏で潰れる維管束。できるだけ花は踏まないように歩こうとするが、避け切れない。そのくらい沢山の花々が地表を覆いつくしていた。自分が走っている、という事実もある。

だってあそこに。

見えたのだ。あの色が。あの髪が。

目標めがけて走る。おかしいな。息が上がる。てっきり、この体は死んでいるものだとばかり思っていたけれど。

なかなか近づけない。名前を呼んだ。一度。二度。三度目でこちらを見た。よかった。ここにいた。違う人じゃない。その笑い方。どんな彼でも笑顔は

似ていたけれど、やっぱり違う。

黒い瞳孔を取り囲むガラス玉のような虹彩。

空。海。木々。花。鳥。風。そして雨。

地球の美しさを集めたような碧。

深い色。揺れる水。変わる空気。

いろんなことを諦めて。いろんなことを背負って。いろんなことを捨てて。一つだけしか持っていない。その生の潔さ。綺麗なものも汚いのも、全部の感情を乗せた微笑み。

笑えることが奇跡だと思える笑顔。大好きな笑顔。

もう、すぐそこにあった。花の中座る彼の隣に腰を下ろす。暑い。ネクタイを緩める。なんだって僕は律義にこの服を着ているんだか。一つ息を吐く。吸う空気は優しい。

「やっと見つけた」

赤と黄色の変わり目の空の下、君は髪も肌もその色に染めて笑っていた。そ

んな顔で笑われてしまったら、こちらも笑うしかないじゃないか。見つめ合うのが照れくさくて、空を見上げて笑った。嬉しい。可笑しい。幸せだ。

また会えた。やっと。

「よく来たな」

彼から口を開くのは今も昔も珍しい。それも嬉しい。ここで待ってたのかな。

「追いついたと思っても、すぐに遠くに行っちゃうんだから」

何回も、何回も擦れ違った。きつと、向こうも気付いていたはず。もしかして、逃げているのかもしれないと思った。でも、待っていてくれた。

空を見上げる。ちらりと見ると、彼も空を見ていた。笑みがこぼれる。

絶対に僕を待っていたと断言できる。だって、この空の色。

初めて互いの存在を認識した時の空の色だ。あの時は、空なんて見ている余裕はなかったけれど。

「覚えてるか？」

「覚えてる」

だからここにいます。数え切れないくらいの世界を見てきた。数え切れないほどの君と出会った。みんな似ていた。いや、同じだった。みんな君だった。でも、この約束を知っているのはたった一人。

このスレインだけだ。そして、この僕だけなんだ。

「じゃあ、答え合わせをしよう」

花の上の手が重なった。そっか。スレインも、同じだ。

僕を探していたんだ。

「正解するのが分かっている答え合わせて、いいね」

スレインが頷いた。ああ、ここにいます。ここで、こうして一緒にいる。

やっと会えた。無数に重なる色の空。風に揺れる花畑。君と僕の二人だけ。

まるで天国のようなところだ。まさか、ここがそうなのかな。

そんなこと、どうでもいいか。

触れた手は少し硬くて傷だらけ。握ると握り返される。

この手なんだ。

スレインがまた笑った。そんなに笑ってばかりいたら、こっちは涙が出てしまふ。ああ、やっただ。

やっとなえる。やっとなける。一緒に。

君がいるところが、僕のいる場所だ。

「せーの」

虹の麓で出会う百万回目の君が口を大きく開いて言った

僕の名前は空の色

伊奈帆×スレイン

あとがき

この本を手にとっていただき、そして最後まで読んでいただいてありがとうございます。

別世界軸のお互いに出会ったら、スレインは「違うけど伊奈帆」伊奈帆は「スレインだけど違う」って思うんじゃないか。でもやっぱりそれぞれの世界線で唯一無二の存在であってほしいなと思いました。

「雨の底」の蛇足ですが靴がないのは足がないからです。この神殿的な場所では地球のアルドノアみたいな古代のテクノロジーが発見された場所で、暴走してノアの箱舟システム（地球終了）が作動したって設定です。そのせいで半分だった月は完全に消失し、二人も大洪水に身を投げる、という救いような話です。この事態に際し軍人がデューカリオンをノアの箱舟って呼んでユキ姉とか韻子ちゃんとか、あの辺のみなさんは火星に移民するって設定があったんですけど入りませんでした。本編はすべてがゼロになった世界、そして学

園編はすべてがゼロのままの世界、ってこじつけたかったです。

スレインが幸せに笑えたら奇跡だと思います。本編後、いつかそんな日が来ることを願っています。

「雨の中花のように舞い降りたのは天使かそれとも」

◇イメージソング「生物学」People In The Box さん

「雨の底で靴を無くした君と二人思い出話に花を咲かす」

◇イメージソング「Petrichor」雨のパレードさん

「地上百十一メートルの観覧車の中で聞く花火の音は銃声と似ている」

◇イメージソング「打上花火」米津玄師さん

「虹の麓で出会う百万回目の君が口を大きく開いて言った僕の名前は空の色」

◇イメージソング「雨の街路に夜光虫」米津玄師さん

四方山話に最後までお付き合いました。ありがとうございました。次の本でもお会いできますように。

鳴海

六月の雨 九月の花火

発行 Scramble/鳴海

発行日 2018.9.23/ZEROの方舟 09

印刷所 (株)しまや出版様

Mail jineg720@yahoo.co.jp

Twitter @narumiblue

PixivID narumi07

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはご遠慮ください。